

ヒトラーとドイツの東方支配

谷 喬 夫

I ヒトラーの世界観

1. 帝国主義ナショナリズム
2. 人種論—社会ダーウィン主義と人種ロマン主義
3. 反ユダヤ主義

II ヒトラー政治構想の前提

1. ドイツ外交と帝国主義の遺産
2. 東方支配への通路—生存圏とオーバー・オスト

III ヒトラーとドイツの東方支配

1. オポチュニストかプランナーか？
2. ヒトラーのプログラム
3. ヒトラーの東方政策の起原

I ヒトラーの世界観

ヒトラーは『わが闘争』(1925-27年)や『第二の書』(1928年)において、自分の歴史観、社会観について雄弁に語っており、戦時の1941年から記録された『ヒトラーの食卓談義』をみても、その基本線は生涯不変であった。

ヒトラーの世界観の基礎として、帝国主義ナショナリズム、社会ダーウィン主義、人種論、反ユダヤ主義を挙げることができる。それらのイデ

オロギーは19世紀後半のヨーロッパで、多くの場合相互に纏れ合って成長したものであるが、とくにドイツでは第一次世界大戦（1914 - 18年）に前後して著しく急進的色彩を帯びた。1889年にオーストリア＝ハンガリー帝国の周辺部に生まれたヒトラーは、リンツやヴィーン、ミュンヘン時代を通じてこうした時代の政治的空氣を十分に吸い込んで成長した。『わが闘争』に結実したヒトラーの世界観はこれらの急進化したイデオロギーを継承かつ統合し、その危険なポテンシャルを最も凶暴な形態にまで展開したものである。ヒトラーの世界観は突然変異としてドイツ史に登場したわけではない。

1. 帝国主義ナショナリズム

歴史学では、1880年代後半から第一次世界大戦の終焉までのヨーロッパ史を〈帝国主義の時代〉という。ヒトラーが生まれた年のヨーロッパはまさしく帝国主義時代の開幕期であった。帝国主義を一言でいえば、ヨーロッパ強国による支配の世界的拡大であり、その結果生じた列強間の政治的、経済的、文化的緊張であって、やがてそれは史上初めての世界大戦を生み出した。その背景にあるのは、産業化と民主化によるヨーロッパ列強の国力（工業、金融、交通、軍事、人口、文化などの諸能力）増大である。ヨーロッパの世界拡大は初期においてはスペイン、ポルトガルが先行したが、19世紀後半は〈パクス・ブリタニカ〉といわれるように世界帝国を形成した英国が先陣を切り、フランスがこれを追う展開となっていた。しかし1871年、プロイセンがフランスに勝利し中欧にドイツ帝国が成立するとヨーロッパ列強の権力関係に新たな緊張が走り、ロシア、イタリア、オーストリア＝ハンガリーなども産業や軍事の近代化を図って、覇権を争う構えを見せ始めた。

各国が覇権をめぐる植民地ないし保護領を世界に求めることになったのは、経済的には1902年に『帝国主義』を書いたJ. A. ホブスン（John A.

Hobson) が述べたように、国内市場の飽和から不可避となる製品輸出、新たな資本投下の必要性のためであり、さらに資源確保や自国の過剰人口の移住先を求めてのことである⁽¹⁾。こうした競合関係は大英帝国内部の公論にも反作用を及ぼした。1887年、植民地政治家セシル・ローズ (Cecil Rhodes) は次のように述べている。「思うにもし神がおられるのなら、神が喜んで私になさしめるであろうことがある。すなわちそれは、可能な限り多くのアフリカの地図を大英帝国の国旗色で塗りつぶすために、また他のどこであれ英語を母国語とする人種の団結を促進し、その勢力範囲を拡大するために、わがなしうることを行うことである。」⁽²⁾ ローズの発言の背景には、1881年のフランスによるチュニジア保護領化と、翌年のイギリスによるエジプト占領によって開始された、いわゆる〈アフリカ争奪戦〉があり、これこそ帝国主義の開幕を告げるものであった。

しかしドイツの宰相ビスマルクは、国際関係の緊張が誕生したばかりの帝国の存立を危機にさらしかねないことを警戒し、ドイツの地位を保全するために、植民地などをめぐる勢力拡大を自制した。しかし1890年にビスマルクが失脚しヴィルヘルム2世の時代を迎えると、ドイツはイギリスと並ぶその増大した国力を背景に世界強国への野望を公言し始めた。ヒトラーがリンツ近郊ラムバッハで初等教育を受けながら教会の合唱団に参加していた1897年、ドイツ帝国の外務次官で後に宰相となった帝国主義者ビューローは、ドイツと列強の対等な関係を求めて議会で次のように述べた。

われわれは、自分たち固有の利益がそれにふさわしい認知を確実に与えられるという予想のもとに、東アジアにおける他の列強の利益を最終的に喜んで考慮する用意がある。(喝采!) 一言でいえば、われわれは誰も日陰に立つことを望まないが、われわれもまた陽の当る場所を要求するものである。(喝采!) 東アジアにおいても西インドにおいても、われわれはドイツ政策の伝統に忠実に、不必要な過激さを持たず、しかし何らの弱みも見せず、われわれの権利と利益を守り抜くよう努めるで

あろう。（激しい喝采！）⁽³⁾

「陽の当る場所」という言葉は、翌年の皇帝による「世界政策」宣言とともに、曖昧だが時代の気分を象徴し、後年ドイツ外交のキャッチフレーズとなった。ビューロー演説の直前には、ドイツは中国の山東省湾岸を占拠、ヨーロッパ列強による世界支配はアフリカから、中近東、中国、アジアに拡大し、また世紀の転換を迎えるころには、アメリカと日本という新勢力が台頭してきた。したがってヒトラーの青少年時代は、ヨーロッパの国家システムが自制を喪失した覇権ゲームとなり、18世紀以来の〈勢力均衡（balance of power）〉原則が機能不全に陥り、やがて破綻を迎える時期にあたっていた。ヒトラーは『わが闘争』において「歴史とはそれ自体、民族の生存闘争の過程を表したものである」⁽⁴⁾と述べ、また「永遠の闘争において人類は偉大になった—永遠の平和において人類は衰退するのだ」⁽⁵⁾として平和主義やヒューマニズムを嫌悪している。ここには帝国主義と世界大戦の時代経験が息づいているといえよう。

帝国主義には経済的海外進出（経済的帝国主義）、政治的覇権の追求（政治的帝国主義）という面と絡み合って、ナショナリズムを動員した〈社会帝国主義〉というもう一つの側面がある。19世紀後半、民主化（大衆の政治参加）の進展とともに、排他的ナショナリズムが各国で高まった。こうしたナショナリズムには、国民生活の向上に伴う大国意識、外国への妬み、経済危機への不安と不満、都市の孤独感、植民地原住民や少数民族への人種的優越感などが混在している。そして国内に深刻な階級、地域、宗教などの利害対立を抱えていたドイツの政治エリートにとって、ナショナリズムは弱体化した君主的正統性に代わる国民統合イデオロギーとして利用価値あるものであった。かれらは利害対立の激化を議会政治によって調整するよりも、ナショナリズムを道具化し、外交の成果を内政の手段として利用し始めた。したがってコストパフォーマンスを無視したバクダッド鉄道計画などが世界政策として喧伝されたわけである。H. U. ヴェーラー

によれば社会帝国主義は支配技術であり、「外交の成果やセンセーショナルな行動によって、『権威的国民国家』の正当性基盤を強化し、緊急の内政改革の課題から目を転じさせる」⁽⁶⁾ ものである。こうした政治指導が広まると、国際関係は相互の国民的威信を賭けたアリーナと化し、冷静な利害計算に基づく外交術は衰退せざるをえない。その行き着いたところが世界大戦であり総力戦であった。

排他的ナショナリズムの急進化はとくに遅れてきた諸国家（ドイツ、イタリア、ロシア、日本）で著しく、さらに大国周辺の政治的独立を果たしていない少数民族を強く刺激した。また少数民族のナショナリズムの高揚は、多民族を内包した古い〈帝国〉という政治形態のロシア、オーストリア、トルコにおいて、とくに深刻な政治統合の危機をもたらした。こうしたナショナリズムの台頭のなかで、ヒトラーがリンツ時代に最初に政治イデオロギーの洗礼を受けたと思われるのは、多民族国家ハプスブルク帝国内の汎ゲルマン主義であった。それは東ヨーロッパのスラブ系諸民族に広まったスラブ民族主義への反作用として、オーストリアのドイツ人の中に醸成されたものである。ヒトラーは『わが闘争』でも名前を挙げているとおり、リンツの実科学校に在学中、同校教師でドイツ民族主義派の市議会議員レオポルト・ベツチュ（Leopold Poetsch）博士から、汎ドイツ主義的教育を受けたし、リンツではドイツ主義の新聞も発行されていた⁽⁷⁾。ヒトラーの汎ゲルマン主義はリンツ時代にすでに、多民族国家ハプスブルクの抹殺を願うまでに高まっていたのである⁽⁸⁾。

さらにヴィーン時代になると、ヒトラーは、ハプスブルク帝国の解体とそこにいるドイツ人のドイツ帝国への統合を叫んだシュェネラー（G. R. v. Schönerer）から大きな影響を受けた。ヒトラーは多民族国家ハプスブルク帝国をいっそう嫌悪し、ミュンヘンに移動（1913年）してからはドイツ帝国内の汎ドイツ主義（全ドイツ連盟）に、すなわち排他的ドイツ帝国ナショナリズムに傾倒してゆくことになった。ヒトラーにとって1938年のオーストリア併合は、思想的にはリンツやヴィーン時代に遡ることができる。

2. 人種論—社会ダーウィン主義と人種ロマン主義

ヒトラーの思想形成はまず帝国主義ナショナリズムをもって始まったが、そのナショナリズムに似非科学的な根拠を与えたのが社会ダーウィン主義であり、さらにそこに幻想的色彩を加味したのがド・ゴビノーに始まる人種ロマン主義である。その影響は『わが闘争』のなかに見紛うことなく読み取ることができる。まずダーウィン主義からみていこう。

1859年にダーウィンは『種の起源』を発表し、生物進化の原則として「生存闘争」、「自然淘汰（選択）」、「適者生存」を挙げた。創造神を否定するダーウィン学説はキリスト教会の激しい攻撃にさらされたが、産業革命と科学技術の時代潮流に押され支持者を拡大していった。そして社会ダーウィン主義とは、生物進化についてのダーウィンの説明を人間社会に適用することである。しかしながら、E. コーディルも言うように社会ダーウィン主義は多面的な顔をもつ。「それは社会主義と資本主義双方を擁護するために使われたし、競争とともに協調の必要性も説明し、社会的調和も社会的紛争とともに正当化してきた。」⁽⁹⁾ じっさい、社会主義者も自由主義者も、さらに帝国主義者もダーウィンを引き合いに出すことができた。それは社会ダーウィン主義のなかに、ホップズを思わせる闘争による淘汰という側面と、スペンサー（H. Spencer）⁽¹⁰⁾ によって代表される自由主義的な進化という側面があったからである。しかしドイツでは、社会ダーウィン主義は、生存闘争であれ進化であれ、多くは「陽の当る場所」を求める全ドイツ主義者に格好の理論的支柱を提供した。

ドイツではダーウィン主義はヘッケル（E. Haeckel）によって物理、生物、心理の全世界を統一的に説明する「一元論的唯物論」にまで徹底された。ヘッケルによれば国家における人間は、無機的自然における結晶、生物における細胞と同質であって、社会は自然科学的に解明されうる⁽¹¹⁾。だが逆にいえばそれは物体と生命の精神化でもあって、その意味ではヘッケルは「一元論的自然宗教の預言者」⁽¹²⁾ であるともいえる。レーニン

ヘッケル唯物論を「階級闘争の武器」として評価した（『唯物論と経験論批判』）が、ドイツにおいてはヘッケルによって導入された社会ダーウィン主義は確実に帝国主義者の武器となっていった。ヒトラーも『わが闘争』において、「生命全般をより高度に品種改良させようとする自然の意志」（＝進化）を肯定し、ダーウィン流自然法則から強者の権利を案出している。

より強い者は支配せねばならず、より弱い者と融合して本来の偉大さを犠牲にしてはならない。生来の弱者だけがこれを残酷であると感じる。しかしそのためにまた、かれは弱く愚な人間であるしかないのである。というのも、もしこうした法則〔強者の支配〕が支配しないとしたり、あらゆる有機的生命が到達可能と思われるより高度な発展など、考えられないことになってしまうからである⁽¹³⁾。

ヒトラーは生存闘争と勝者の支配を強調することによって、「政治的思考の自然主義化」を生み出し、強者の権利によって倫理や伝統、ヒューマニズムを侮蔑する「政治様式の野蛮化」をもたらした⁽¹⁴⁾。ヒトラーによる精神世界の生物学化、それに伴う市民的倫理への軽蔑は、ニーチェではなく社会ダーウィン主義から影響を受けたものである。

こうして社会ダーウィン主義者は人間を生物学的存在に還元したが、そこでかれらが何を発見したかといえ、それは人種と遺伝という生物学の概念であった（遺伝学自体は1900年にメンデルの法則が再発見されてから発達したが、遺伝的資質についてはそれ以前から認識されていた）。ここに生物科学に基づくとされた人種と遺伝をキーワードとする学問分野が生まれる。その代表が、〈人種衛生学〉や〈優生学〉である。これらの新興学門は20世紀最初の10年に急速に拡大したが、第一次大戦後ドイツ民族の再建という課題のなかで、右翼ナショナリストやナチズムのなかに強力な後援者を見出した⁽¹⁵⁾。そして結論的にいえば、人種改良、アーリア

人種の育成というユートピアの果てに、人種諸学は結局のところ、社会的弱者（病者、身障者、精神病者など）の組織的抹殺という科学的野蛮だけを残すことになった。プレッツ（A. Ploetz）によって創始された人種衛生学⁽¹⁶⁾は、もともとは包括的な人間のヘルス・ケアの一要素として構想された。だからプレッツもその協力者であったシャルマイヤー（W. Schallmayer）も、当初はアーリア人種を特権化したり反ユダヤ主義を掲げたりもしなかった⁽¹⁷⁾。しかしド・ラプージュ（G. V. de Lapouge）やヴォルトマン（L. Woltmann）らの〈人種人類学〉、さらにはハンス・ギュンター（H. F. K. Günther）のような狂信的人種学が右派やナチに影響力を拡大するなかで、人種衛生学もナチズムへ急速に接近していくことになった。1930年には、プレッツはナチの機関誌によって、反ユダヤ主義や東方進攻思想の先駆者ド・ラガルド（P. de Lagarde）らと並んでナチズム世界観のヒーローに祭り上げられた。

人種論は科学的ダーウィン主義から派生したばかりでなく、他方で文学的な歴史フィクションにもその起源をもっている。科学的人種論と歴史ロマン主義との密通は、ヘッケルが20世紀になってゴビノー⁽¹⁸⁾の銜学的、ディレッタント的『人種不平等論』（1853 - 1855年、ドイツ語訳1898 - 1901年）に影響され、現代ヨーロッパ人の人種の価値を称揚し始めたことに象徴的に表れている⁽¹⁹⁾。ゴビノーにとって「もろもろの文明の興亡は、白人種を抵当に入れた人種のドラマ」⁽²⁰⁾である。ゴビノーのペシミスティックな歴史ロマン主義（歴史を高貴で有徳のアーリア人種の没落と、唯物主義の黄色人種や暴徒である黒人種の蔓延の悲劇物語として描く）は社会ダーウィン主義とは何の関係もないし⁽²¹⁾、かれは反ユダヤ主義者でもなかった。しかしゴビノーはダーウィン以後の自然科学を装った人種論に芸術的装飾を与え、社会から脱落した者の偏頗な人種神秘主義や、さらに反ユダヤ主義にも有毒な靈感を与えた。ドイツにおいてゴビノーの名を高めたのは、反ユダヤ主義に染まった音楽家R. ワグナーとバイロイトに巣食うその一族であった。やがてワグナーの娘婿で「人種

神秘主義」⁽²²⁾ のチェンバレン (H. S. Chamberlain) は『19世紀の基礎』(1899年)において、歴史を高貴なアーリア人と悪魔のユダヤ人との生存闘争として描き、パイロイトの権威を後光にドイツ市民階級に反ユダヤ主義を普及させた。

ヒトラーの人種思想は、一方では社会ダーウィン主義によって「科学的」に基礎づけられるとともに、他方ゴビノーのロマン主義や過激な反ユダヤ主義者のパラノイアからもインスピレーションを受けている。『わが闘争』第一巻第11章「民族と人種」においてヒトラーは人種を「文化創造者」、「文化保持者」、「文化破壊者」に区分し、北方アーリア(ゲルマン)人種だけが文化を創造し、それが人種混交によって種の墮落を招いたとする物語を語っているが、これは明らかにゴビノーの焼き直しである。ただしヒトラーはゴビノーのペシミズムを断固として排除し、ゲルマン人種の保持のみならず、チェンバレンと同様その世界的使命を闘争目標に掲げるのであるが。ヒトラーの言葉を聞こう。

われわれが今日、人間文化において、すなわち芸術や科学、技術のもろもろの成果において眼の前に見出すものは、ほとんどアーリア人の創造的産物である。…アーリア人は人類のプロメテウスであり、その輝く額からは、いつの時代にも天才の神秘的な閃光が放射された。かれは絶えず新たに炎を燃え上がらせ、その炎は、黙した神秘の夜を認識によって照らし、人間に地上の支配者となる道を高く登らせたのである⁽²³⁾。

アーリア人種はその血の純粋性を放棄し、そのために、かれ自身が創造した楽園に留まる事が出来なくなった。アーリア人は人種混血によって没落し、徐々にその文化的能力をいっそう失ったのである。そしてついに、アーリア人は精神的にも肉体的にも、その祖先に類似するより被征服者や原住民と類似し始めたのであった⁽²⁴⁾。

そうではないのだ。もっとも神聖な一つの人権があるだけであって、その権利はもっとも神聖な義務でもある。すなわちそれは、最良の人類の保持を通じて、その存在をより高貴に発展させるために、血の純粋性の保持に配慮することである⁽²⁵⁾。

それゆえ民族至上主義国家の最高の目的は、文化供給者としてより高い人類の美と品位を創造するような人種の本源的要素を保持するために配慮することである⁽²⁶⁾。

3. 反ユダヤ主義

さてヒトラー世界観の構成要因の最後の、しかし最大のものは反ユダヤ主義である。人種を歴史の主役に見立て、人種間の優劣に固執するところから反ユダヤ主義へ至る道は、ほんの一步に過ぎない。じっさいヒトラーは『わが闘争』第11章において、アーリア人種を神格化した直後に、その対極としてユダヤ人を「文化破壊者」として悪魔化している。ヒトラーにとって歴史はチェンバレン同様、アーリア人種とユダヤ人種の生死を賭けた闘争に他ならない。まずヒトラーが影響を受けた反ユダヤ主義について概観しておきたい。

ヨーロッパで中世キリスト教世界が形成されてから、ユダヤ人への迫害はキリストの殺害者という宗教的根拠をもつ。ユダヤ人は西暦70年に故郷パレスチナを追われ世界に拡散した。ヨーロッパの領主や都市はユダヤ人の定住を拒否したから、かれらにはもっぱらゲトと呼ばれる狭隘な貧民窟を形成して生活した。中世以来ユダヤ人への暴力や略奪（ポグロム）がしばしば発生したが、それはたいてい戦争や飢饉、疫病といった社会的危機を背景にしていた。すなわちユダヤ人は住民の蔓延する不安や鬱積した不満のはけ口として責任を転嫁され（ユダヤ人は井戸に毒を入れる、子供の血を吸う、戦争利益を得るなど）、スケープゴート（犠牲の山羊）と

されてきたのである。しかしフランス革命の人権宣言以来、進度の違いはあれ、19世紀の西欧諸国ではユダヤ人の解放（市民権の付与）とユダヤ教徒自身のキリスト教への改宗、ヨーロッパ市民文化への同化が拡大していった（これをロシアや東欧で正統ユダヤ教を順守していた〈東方ユダヤ人〉に対して西欧ユダヤ人と呼ぶ）。1871年に成立したドイツ帝国もユダヤ人の法的平等を保障した。しかし産業革命と民主化が進展し、近代合理主義によって人びとが呪術から解放され始めたはずの1870年代後半、ダーウィン主義由来の生物学的人種概念によって武装し、しかもゴビノーや奇怪な人種神秘主義によってインスパイヤーされた、狂信的反ユダヤ主義が登場してきた。

狂信的反ユダヤ主義がヨーロッパ文化世界に浸潤し始めた背景を探ると、そこには〈社会帝国主義〉ナショナリズムと同様の問題が浮上する。資本主義の発達は、階級対立の激化や貧困問題の深刻化、社会（共産）主義の脅威、都市化による生活環境や健康の劣悪化、享樂的大衆消費文化（物質主義）の蔓延による社会倫理の空洞化など、深刻な社会・政治問題を発生させる。客観的にみれば、反ユダヤ主義者はこうした近代の諸矛盾に起因する人びとの不満や怒りをユダヤ人の存在という標的に誘導し、新たなスケープゴートに仕立て上げたのである。「近代のまたわれわれの生きている現在の、否定的な評価を受けたすべての要素」がユダヤ人に帰責されたのは、「ユダヤ人の解放と近代的なものの形成とが同時進行してきた」⁽²⁷⁾ からである。それゆえ「反ユダヤ主義はそもそも近代社会への不満を表すイデオロギーとして、近代社会を構成する諸原理に対する異議申し立てのイデオロギーとして」⁽²⁸⁾ 社会に蔓延したルサンチマンの心情に火を放った。

例えばドイツにおける反ユダヤ主義の先駆者W. マルーは『ゲルマン民族性に対するユダヤ民族性の勝利』（1873年）において、社会ダーウィン主義的な生物学的自然法則からゲルマン民族とユダヤ民族の人種の生存闘争を基礎付けた。マルーによれば、「世界支配」をめざすユダヤ人は「自

竟的かつ典型的なリアリズム」をもって、「詭計」と「狡猾」によって「すべての非ユダヤ人を抹殺する義務」を遂行しているとされる⁽²⁹⁾。これに対抗しようと、マルーは歴史上初めて「反ユダヤ主義連盟」を設立した。こうした反ユダヤ主義は、オーストリアの汎ドイツ主義者シェーネラー、プロイセン保守党に属する宮廷牧師シュテッカー（A. Stoecker）、バイロイトのワーグナーやチェンバレン、ベルリンの歴史学者トライチュケ（H. v. Treitschke）、哲学者デューリング（E. Dühring）らによって19世紀末のドイツ社会に次第に影響力を拡大していった。それは第一次大戦末、ドイツの勝利が見込みなくなるにつれて、敗北の責任を自覚的にユダヤ人に転嫁し、帝国主義の社会統合イデオロギーとしてその有効性を実証することとなったのである⁽³⁰⁾。

ヒトラーの反ユダヤ主義はこうした時代の雰囲気をつまみ吸いこんだものである。その反ユダヤ主義の特徴をみて行こう。ヒトラーは人種論の影響のもとにユダヤ人を生物学的人種と捉える。また他の反ユダヤ主義者にも先例があるが、ヒトラーはユダヤ人を生物のなかでも下等生物、細菌に喩える。ヒトラーによればユダヤ人をユダヤ教徒として宗教的に規定することは致命的な誤解であり、「ユダヤ人は常に明確な人種的特性をそなえた民族」⁽³¹⁾である。改宗して諸国民の文化に同化していった場合でも、生物としてのユダヤ人の人種的特性は不変であった。ユダヤ人は「常に他の諸民族の体内に住む寄生虫」として、「永遠の吸血蝨」⁽³²⁾として、あらゆる民族に侵入してその文化を破壊し、ペスト菌のように危険な人種である。ヒトラーはユダヤ人を有害な生物のタームで規定する。あたかもその絶滅が害虫の駆除と同じだと暗示するかのよう。

同時にかれは生物学とされたユダヤ人種に、不変の文化的特質を付与し、これを極端な「エゴイズム」であるとする。ユダヤ人は、アーリア人が個人的利益よりも共同体への奉仕を優先し、全体のために進んで自己を犠牲に供し、理想主義に殉ずる特質をもつものに対し、その対極をなす人種なのである。これはゴビノーの人種ロマン主義をマニ教的善悪二元論でブ

レンドしたものといってよい。ユダヤ人の神はカネである。かれらは近代世界がユダヤ人を解放したことにつけ込み、自由主義と議会政治を隠れ蓑に、国内でジャーナリズム（文化産業）や金融、商業界を手中に収める。そして彼らは世論操作と俗悪な娯楽によって諸国民の精神的抵抗力を奪うとともに、人びとをユダヤ金融資本、商業資本の利子奴隷と化し、マルーが言うように自らがヨーロッパの支配者になろうと企んであるのだ。

こうした善悪二元論には、ヒトラーがヴィーン時代にふれたと思われるランツ・フォン・リーベンフェルス (J. L. v. Liebenfels) の、偏執狂的な血の神秘主義⁽³³⁾もたしかに加味される。しかしヒトラーにおいては神秘主義というより、害虫イメーজとともに、血をめぐる純粹—不浄の生理的感覚が決定的である。ユダヤ人はドイツ人女性を、結婚するか誘惑することによって人種混交を図っている。この点でヒトラーの感性を刺激したことが一目瞭然なのは、リーベンフェルス以上にA.ディンター (A. Dinter) の『血に反する罪』(1917年)である。この三文小説は、あるユダヤ人商業顧問がブロンドのドイツ人少女を次々と誘惑し、懐妊させている姿をポルノ的に描き、当時ベストセラーになった。ディンターによれば、ユダヤ人は快樂のためばかりでなく、計画的にドイツ人の血を汚染することによって、アーリア人種の文化的価値の破壊を狙っているのである⁽³⁴⁾。『わが闘争』は次のように述べる。

黒い髪のユダヤ人青年は悪魔のような喜びを顔に浮かべて、疑うことを知らぬ少女を何時間も待ち伏せし、その血で彼女を汚し、彼女をその民族から奪うのである。あらゆる手段を用いて、ユダヤ人は征服すべき民族の人種的基礎を腐敗させようとする。…(中略)…それによって否応なく生じる混血化によって、ユダヤ人は己の憎悪する白人種を破壊し、それを高度な文化的、政治的位置から転落させ、自らその支配者の地位に昇ろうとするのである⁽³⁵⁾。

ヒトラー反ユダヤ主義の構成要素として、ダーウィン主義由来の人種学、害虫メタファー、ゴビノーやチェンバレンの人種ロマン主義、さらに神経症的な血をめぐる生理的清潔感をみてきた。さらにこれに付け加えるべきは、『わが闘争』でも言及されている『シオン賢者の議定書』、すなわちユダヤ人が〈世界支配〉を企んでいるとする〈陰謀〉説であり、ドイツはその犠牲となりかねないという被害妄想である。このパンフレットはユダヤ人の長老たちの24回の秘密会議の議事録とされるが、実際にはイギリスやフランスの文学作品や評論のある部分を剽窃し、そのなかにユダヤ人の陰謀説を埋め込んだ偽書である。それは誰が作成したにせよ、世紀末ロシアでボグロム扇動家によって利用されたが、当初はロシア内の一文書にすぎなかった。しかし『議定書』は、ボルシェヴィキ革命に対する反革命グループによって1919-21年ころドイツの右派勢力に輸入され、ドイツの反ユダヤ主義者によって流布された⁽³⁶⁾。すなわちここでボルシェヴィキ革命がユダヤ人の世界支配の陰謀説と接合されたのであった。じっさい、革命指導者にはトロツキーなどのユダヤ系ロシア人が目立ったから、この転用は一層容易であった。この偽書をナチ反ユダヤ主義の武器庫に収めたのは、後にナチ・イデオログとなった若きA. ローゼンベルグである。ロシアから亡命したバルト・ドイツ人ローゼンベルグは1923年に『議定書』の註解を出版したが⁽³⁷⁾、ヒトラーもまたボルシェヴィキ革命をユダヤ人の陰謀であると確信したのであった。

この民族の全存在がどれほど止めどない嘘に基づいているかは、ユダヤ人によって限りなく嫌われている『シオン賢者の議定書』のなかに比類なく示されている。それは偽書である、と「フランクフルト新聞」[ヒトラーの考えではユダヤ系資本 一谷]は繰り返し世間に苦情を伝えているが、これこそその書が本物であることの最上の証拠である。多くのユダヤ人が無意識に行っているかもしれないことが、この書では明確に述べられている。それが問題なのだ。この文書での秘密の暴露がいかな

るユダヤ人の頭から出たものであろうと、それはどうでもよい。決定的に重要なのは、それがまさしくぞっとさせるほどの正確さでユダヤ民族の本質と活動を暴露しており、しかもそれらの内的連関や究極的な目標を説明していることである⁽³⁸⁾。

ヒトラーの認識はこうである。歴史的にみるとユダヤ人は商人としてヨーロッパに浸透し、やがて諸侯に取り入って特権的宮廷ユダヤ人となった。しかし19世紀になってユダヤ人が解放されると、今度は彼らはドイツ人に成りすまし、第一次大戦では不当な戦争利益を収奪したうえで、新聞や議会、民主主義を利用して君主制の打倒に成功した。そして資本主義の発展とともに膨大な労働者階級が成立すると、彼らはまたしてもそれを利用しようとする。

この新しい階級が一般的経済的变化から発展して行くや否や、ユダヤ人もまた自分がさらに発展するための新しい先導者をはっきりと見出す。ユダヤ人はかつてブルジョアジーを封建的世界の城壁を破壊する道具に利用したが、今や労働者をブルジョアジーに対して利用するのである。ユダヤ人はかつてブルジョアジーの陰に隠れて市民権を秘かに入手したが、今や労働者の生存闘争のなかに、自分たちの支配へ通じる道を見出そうと望んでいる⁽³⁹⁾。

したがってマルクスがユダヤ人であったことから分るとおり、マルクス主義は新手のユダヤ主義なのである。プロレタリアート独裁とはユダヤ人独裁の偽装に他ならない。彼らはロシア革命の血生臭い殺戮のなかで、「国民ユダヤ人」から血に飢えた吸血ユダヤ人へと変身しつつある。その意味で『議定書』の陰謀は着々と実現に向かっている。ヒトラーは多くの死者を出したロシア革命時の内戦⁽⁴⁰⁾を次のように判定する。

この種のもっとも恐ろしい事例がロシアである。そこではユダヤ人は3000万の人間をまことに狂信的な野蛮さで、一部は非人道的な苦痛を与えて殺害するか餓死させたが、それというのも、ユダヤ人の文士や証券ギャングの一団のために大民族の支配権を調達するためであった⁽⁴¹⁾。

こうしてヒトラーの頭のなかでは、ドイツは今や一方では国際的ユダヤ金融資本に、他方ではボルシェヴィキの暴力に、すなわちユダヤ人の世界支配への陰謀に挟撃されている。したがってヒトラーの反ユダヤ主義を飾る最後の特性は、『議定書』の陰謀説に基づくパラノイアである。心理的にみれば、ヒトラーのユダヤ人への攻撃衝動の背後には、自分たちこそ受難者であるという被害妄想が潜んでいる。こうした妄執の果てに、1941年、ドイツが不可侵条約を破棄して電撃的にロシアへ侵入したさい、ヒトラーはその戦いをフランス、英国との通常の戦争と区別し、戦時国際法を無視した、殺るか殺られるかの〈絶滅戦争（Vernichtungskrieg）〉であると宣言したのであった。

II ヒトラー政治構想の前提

これまで述べてきたのはヒトラー世界観の基本であるが、それではヒトラーはドイツの敗戦後、画家から政治家への変身を果たすなかで、ドイツの未来を具体的にいかなる政治構想で描いたのであろうか。それはドイツの帝国主義政策のなかで、連続性と断絶を合わせもつものであった。ヒトラーの政治構想を明らかにするためには、われわれはまず戦前、戦中のドイツ帝国主義と世界大戦を振り返り、ヒトラーがそこからいかなる教訓を引き出したのかをみる必要がある。

1. ドイツ外交と帝国主義の遺産

ビスマルクは東西をロシア、フランスという大国に挟まれた新帝国の安全を維持するために、外交的手段によって「他の諸大国の利害を相互に競わせ、もろもろの緊張をすべてヨーロッパの中心から周辺へと誘導し、その後さらに、アフリカやアジアで引き起こされる列強間の諸対立を利用し尽くそう」⁽⁴²⁾とした。その意味でビスマルク外交は基本的に防衛的なものであった。しかしビスマルク失脚に前後して、ドイツの進路を世界強国政策に求める潮流が急速に浮上し始めた。その背景は、ナショナリスト歴史家トライチュケの発言からも読み取れる。

ヨーロッパ国際社会の全発展は見紛うことなく、第二ランクの諸国家をそこから追放することをめざしている。そしてそこから、われわれが非ヨーロッパ世界のことも考慮に入れると、われわれにとって計り知れないほど深刻な展望が開けてくる。こうした非ヨーロッパ世界をヨーロッパ列強のもとに分配するに際して、ドイツはいつも貧乏くじを引いてきた。そしてわれわれが海外でも強国となりうるかという問題においては、まさしく大国としてのわれわれの生存が問われているのだ。われわれが海外でも強国とならなければ、ロシアとイギリスが世界を分け合う見通しが大きく開けてくる。そうなればロシア人の革の鞭かイギリス人の財布かということになるが、どちらがいつそう倫理を欠き、より恐ろしいものであるか、じっさい誰にもわからない⁽⁴³⁾。

ここには、世界政治の状況が18世紀以来の〈勢力均衡〉から根本的に変質し、今や少数強国による世界支配へ、具体的にいえば英国、アメリカ、ロシアなどによる世界分割へと向かっているのではないかという危惧が表明されている。S. ナイツェルによれば、19世紀末ヨーロッパ諸国、とくにドイツでジャーナリストや学者によって〈世界帝国論〉が流行した⁽⁴⁴⁾。

急進ナショナリストの全ドイツ連盟会長（1893 - 1908）E. ハッセも、世界経済がいまや強国による「巨大な封鎖された世界経済圏」⁽⁴⁵⁾ にブロック化され、ドイツはこのままでは市場から締め出されてしまうと叫んでいる。すなわち〈アフリカ争奪戦〉によって始まる帝国主義、列強によるヘゲモニー闘争の激化は、ドイツが防御に留まることを許さず、「世界強国か没落か」の選択に迫られているという危機意識を生み出したのであった。それは国内では、大衆社会状況の下で醸成された帝国ナショナリズムに格好の触媒を与えたのである。

世紀末から20世紀初頭に至る帝国主義時代の国際構造は、勢力均衡から覇権を争う〈同盟政策〉への転換である。それは外交政策における選択の硬直化を意味した。ヴィルヘルム期のドイツ外交はロンドンとペテルスブルクの間で揺れ動いたが、その基本線となったのは、ヒルグルーバーによれば、「帝国の主権的で独自の進路をいかなる代価を支払ってでも維持しつつ、しかもオーストリア＝ハンガリー（そしてイタリア）との固い同盟によって獲得された中欧での地位を絶対に維持し、危機に際しては攻撃的行動によって《中欧（Mitteleuropa）》の地位の拡大と、さらにその地位のより永続的な保全を追求する」⁽⁴⁶⁾ ものであった。しかし独墺（+伊）同盟は仏露接近を招き（1894年仏露同盟）、ドイツ包囲網の萌芽となった。これをもっとも恐れていたビスマルクは、仏露両面戦争の危機に直面した場合、バルカンやオーストリアを見放してでもロシアの中立を購う覚悟だと告白していたのだが⁽⁴⁷⁾。

それでは植民地帝国主義はどうであったろうか。もともとドイツの海外植民は、民間の少数ナショナリストによって開拓された⁽⁴⁸⁾。ヴィルヘルム期になって、植民地帝国主義の運動は社会的影響力をもつようになる。だがその支持者は、圧倒的に帝国ナショナリズムに感染した（下層）新旧中産階級や教養市民層の一部である。W. J. モムゼンはドイツ帝国主義のなかに、「政府の帝国主義」、「急進ナショナリストの帝国主義」、「非公式の経済帝国主義」⁽⁴⁹⁾ の要素を抽出しているが、中心となったのは非公式の経

済帝主義であって、活動は国際貿易の拡大であった。ナショナリストの世論には、アフリカ争奪戦に刺激され、巨大な〈中央アフリカ (Mittelafrika)〉構想⁽⁵⁰⁾や、モロッコなどへの植民計画も浮上した。しかし産業界は利益の望めないアフリカやアジアの植民地に進出しなかったし、銀行の海外資本投下も、バグダード鉄道を除いては微々たるものであった。植民協会や全ドイツ連盟などによって叫ばれた農業植民に至っては、工業化に伴う国内労働力不足や現地の気候風土からして、応募者は僅少に留まった⁽⁵¹⁾。

したがって政府の帝主義は本格的な海外植民地政策に乗り出すことはなかった。とはいえ、大衆民主主義が開花したヴィルヘルム期ドイツでは、ビスマルクの権威を欠いた外交はますます内政上の諸欲求、情動的な世論と切り離すことができなくなっていた。とくにビューローはその外務次官、さらに宰相在任中 (1900 - 1909年)、〈世界政策〉の名のもとに列強間のヘゲモニー競争に介入し、海外危機やナショナリズムを帝国議会での「結集政策」や深刻な対立を含む社会の政治統合のために利用した。これはヴェーラーがつとに指摘してきた社会帝主義である⁽⁵²⁾。しかしモムゼンも指摘するように、ビューローの外交には世界強国の威信を求める以外に確たるターゲットはなく、多くは場当たりの成果に乏しかった⁽⁵³⁾。とはいえ英国やロシアからみると、ドイツの〈世界政策〉は危険な挑戦にみえたし、国際的緊張を高めるものであった。そして国内では、世界政策は「世界強国か没落か」の好戦的気分を醸成し、その失敗はナショナリストの不満を充進させたのである。

ビューローの〈世界政策〉の挫折以後、先に述べたように、独塊基軸によるヨーロッパ南東、とくにトルコから近東を視野に入れた〈中欧 (Mitteleuropa)〉コンセプトが重要な意味を帯びてきた。それは、ヨーロッパ中央から南東部にドイツのヘゲモニーによる大陸経済ブロック (関税同盟) を拡大する構想である。古くはF. リストに遡る中欧経済圏構想は、戦前ハッセやラーテナウ (W. Rathenau)、戦中はF. ナウマンらに

よって主張され⁽⁵⁴⁾、ビューローの後任ベートマン-ホルヴェークの戦争目的に大きな影響を与えた。とくに海外膨張主義が成果を上げられなくなった「第一次世界大戦に先立つ時期、排他的な中欧経済圏のモデルは、しばしば、時代遅れで現代の経済的要請に答えられない植民地獲得に代わる唯一の現実的な選択肢とみなされたのである。」⁽⁵⁵⁾と同時にこの構想は、中欧から近東への進出をめざすバグダード鉄道建設（1903年—）と相まって、英国の世界政策や、とくにバルカン、近東への南下をめざすロシアの利害と衝突するものであった。

その場合ドイツ指導部は、英国とフランス、ロシアとの利害対立は解消し得ないから、いずれ英国との協調ないし同盟が可能であると考えていた。だがこれはベートマン-ホルヴェークから、理由は違うがヒトラーにまで継続した、致命的な判断ミスである⁽⁵⁶⁾。なぜなら海上帝国としての英国の国益は、まさしく大陸の勢力均衡にあったからである。近東に達するドイツの〈中欧〉世界強国化を許すくらいなら、英国はライバルのフランスや危険なロシアとさえ手をつなぐ用意があったし、事実ドイツ包囲網は徐々に形成されていたのである（1904年英仏協商、1907年英露協商）。英国からみるとドイツが脅威であったのだが、ドイツはこれをよく理解せず、バルカン、トルコをめぐる、ロシアこそが真の脅威（英国にとって）だと考えたのであった。こうして第一次大戦前の数年、独・墺・伊の「同盟」と英・仏・露の「協商」は、外交的試行錯誤とナショナリズムに代表される国内的諸事情を孕みながら、やがて軍事的対決への隘路に踏み込んでゆくことになった。

政治に目覚めたヒトラーが、「ドイツ芸術」の都ミュンヘンに到着したのは、ヨーロッパに危険な暗雲の漂う大戦直前の1913年であった。かれは全ドイツ主義の影響によって、老朽化した多民族国家オーストリアに嫌気がさし、ドイツ帝国に強い憧れを抱いていたのである。戦争勃発と同時にヒトラーは、独・墺同盟に危惧を感じつつ、他ならぬドイツ帝国の「自由と未来」のために戦争へ志願したのであった⁽⁵⁷⁾。

2. 東方支配への道—生存圏とオーバー・オスト

感激して戦闘に身を投じたヒトラーが、『わが闘争』第一巻第4章で開陳された東方支配論を当時から抱いていたとは思えない。ヒトラーがいかにしてそこに辿り着いたかを解明するためには、ドイツが世界大戦、とくに東部戦線でいかなる経験を経たのかを知ることが不可欠である。まず触れておきたいのは、W. D. スミスが明らかにした、ドイツ帝国主義イデオロギーにおける、〈世界政策〉と〈生存圏〉という、相補的ではあるが原理的には異質な二つの要素についてである。

〈世界政策〉とは曖昧な言葉であり、右翼ナショナリストはそこに急進的な対外膨張主義の願望を投射した。しかし少なくとも、ポスト・ビスマルクのドイツ外務省（植民局、その後の植民省を含む）や宰相官房の高級官僚たち、およびそれを歓迎した産業界にとって、世界政策は一言でいえば「ドイツ産業経済を対外関係において保護し拡大することをめざす」⁽⁵⁸⁾のものであって、ビューローが回想しているように、「攻撃的拡大」を意味するものではなかった。その狙いは政府による「非公式の経済帝国主義」の支援である。〈新航路〉の宰相カプリヴィ（L. v. Caprivi）が関税の引き下げによって自由貿易の拡大を狙ったように、世界政策は、これまで保護されてきた土地貴族（ユンカー）の農業利益に抗して、ドイツを産業国家へと転身させようとする意図をもっていた。その点は社会帝国主義者ビューローも同じである。世界政策の主唱者たちは植民地にも関心を示した。しかしそれが急進ナショナリストの思惑と共鳴したのは、世界強国ドイツというイメージである。植民地をめぐる帝国指導部や産業界の関心は、利益の見込めないその経営や希望者のいないドイツ植民ではなく、あくまでドイツの貿易や市場の拡大、さらに資源の確保であった⁽⁵⁹⁾。

〈世界政策〉はいわばドイツの近代化政策であった。それに対して〈生存圏〉概念には近代批判のモチーフが内在している。それはドイツの領土拡張を、民族至上主義的（völkisch）かつ農本ロマン主義的に正当化する

イデオロギーであって、後にヒトラーによってナチ・イデオロギーの中心に据えられた。ヴィルヘルム期の急進民族主義者がこの用語を多用したわけではないが、その思想的内実は戦前戦中に、全ドイツ連盟などの急進ナショナリストによって十分完成されており、ヒトラーはそれを生存圏というタームで受け継いだのである。生存圏の用語は、動物・地理学者で全ドイツ連盟の会員でもあったF. ラッツェル（F. Ratzel）が考案したものである。ラッツェルはダーウィンやヘッケルの影響を受け、生存闘争を、動植物による空間すなわち生存圏を巡る争いとして解釈した。しかし生存圏コンセプトはラッツェルの意図を遥かに超えて行った。もともと「急進ナショナリスト帝国主義」には、植民地に農民階級を形成することによって、本国での産業化や都市化のもたらす弊害（失業、環境悪化、住宅難、道德の腐敗、金銭主義など）を癒し、ドイツ民族性を回復しようという、近代批判と保守革命の意図が含まれていた。領土拡大と民族性強化という要請からすれば、母国から離れた海外植民地よりも、近接する〈中欧〉ブロックを拡大し、そこに帝国の基盤を確立する方がふさわしい。じっさい全ドイツ連盟は、第二次モロッコ危機（1911年）の失態以後、これまでの海外植民からヨーロッパ内陸植民へと重心を転換し、ヒトラー東方構想に至る第一歩を切り開いていった⁽⁶⁰⁾。

1894年の設立以来、全ドイツ連盟はドイツ・オストマルク協会とともに、植民地以前に、プロイセン東部諸州におけるポーランド人やスラブ人の勢力拡大に警鐘を鳴らし、ドイツ農民の入植による民族性防衛を喧伝していた。だがプロイセンの支配階級であるユンカーはもはや当てにできなかった。なぜなら、かれらは、東部諸州で土地をポーランド人に売却したり、安価なポーランド人季節労働者に頼って、ドイツ農民の離村、さらにドイツ民族性の弱体化を放置していたからである。それでは民族性強化にはいかなる手法が残されているのであろうか。ベルリン大学教授のM. ゼーリングは1893年に、プロイセン東部における〈ポーランド人の洪水〉に対抗するために、ユンカー経営に代わる、ドイツ人独立自営小農民とそ

の共同体の建設を提案した⁽⁶¹⁾。全ドイツ連盟が、プロイセン東部諸州のゲルマン化の具体的イメージとして着目したのはこの提案である。そこには独立小農民の「土地」と「自由」がドイツ民族性の核であるとする、農本ロマン主義が潜んでいた。こうしたイデオロギーは、中小農業者の利益を代表し、ユンカー支配のドイツ保守党の急進化を促した「農業者同盟 (Bund der Landwirte)」にも共通する。E. ハッセも「全ドイツ史はドイツ人の植民と文化的開拓 (Kultivation) の歴史である」とする立場から、大土地所有を批判し、中世以来の東方植民を担った独立農民とその村落自治を理想化している。

永続的な（ドイツ人の）入植活動の産物として、ただ村落共同体のみが現れた。小都市は数少なく、大土地農場はごく僅かであった。大土地所有経営は、いつも決まって（ドイツ）農民の追放に、農民の自由の制約に、そして全面的な、あるいは半ばスラブ的な下僕使用や農奴制への逆行に行き着いた。独立農民だけが、入植者のドイツ民族性を永続させる保証を与えたのである。土地と自由は独立農民の合言葉であった。後に残した故郷よりも多くの土地、ドイツ法、さらに出身地で与えられた以上の権利、抑制されたスラブ人よりも高い権利、これらは植民開拓が繁栄するための前提条件であった。新しい入植者の原住民に対する特権なしには、植民開拓は成功しない。村落共同体や郡における自治は、まさしく大地の品質と同じくらい重要である⁽⁶²⁾。

東方植民と農本ロマン主義は、下流中産階級や小農、文化批判的な一部教養市民層の心情を掻き立てるものであった。しかし民族主義的生存圏の基礎を、小農民とその共同体に委ねる限り、それはプロイセン王国の支柱であるユンカーの利害と衝突せざるを得ない。また西部からの移住は労働力不足を懸念する産業界の関心も引かない。しかしその難点を解消できる可能性が、第一次大戦における東部戦線で生じたのであった。そこで見込

まれた膨大な獲得領土によって、民族性強化をめざす〈生存圏〉的モチーフは国内の利害対立を超えて、急速に実現可能性を獲得したのである。

1914年8月の開戦以来、西部ではドイツ軍はベルギーを支配しフランス領内に進軍したが、その後は一進一退を繰り返し、戦線は過酷な物理的消耗戦となっていた。これに対して東部戦線では、ヒンデンブルク（司令官）とルーデンドルフ（参謀長）の率いる第八軍は、数で勝るロシア軍を東プロイセンで撃破した（いわゆるタンネンブルクの勝利）。ドイツ軍はその後も勝利を重ね1918年までに、今日の世界地図でいえば、バルト海沿岸のラトビアやエストニア、リトアニアからロシア支配のポーランド、さらにベラルーシやウクライナの西部を経て黒海に至る広大なロシア領土を占領した。これによって、ドイツのヘゲモニーは〈中欧〉どころか、遙か東方へと拡大し、その前提の下で、軍事的観点と生存圏の膨張主義を統合した政策が現れることになった。これまで西部戦線についてはヴェルダンの戦闘や塹壕戦が長く記憶され、レマルク（E. P. Remark）の『西部戦線異状なし』や、ユンガー（E. Jünger）の『鋼鉄の嵐』などによって文化的にも注目されてきた。しかしドイツ軍が予期せぬ連勝の結果、広大な占領地を獲得した東部戦線については、何故かこれまであまり着目されてこなかった。しかしヒトラーの東方志向を理解するためには、東部戦線の勝利と支配行政、さらに急速に国内で巻き起こった民族主義的入植のユートピアの理解が不可欠なのである。

その典型として、〈ポーランド国境帯状地帯（der polnische Grenzstreifen）〉構想、また占領行政〈オーバー・オスト（Ober Ost）〉の実験を挙げることができる。両者におけるドイツの東方支配の構想と経験は、ヒトラーの東方志向にインスピレーションを与え、後にナチズムの東方支配の先駆的模範とされることになった。ポーランド国境帯状地帯というのは、ロシアに勝利した場合、プロイセン東部諸州とロシア支配のポーランドとの国境線沿いに、ポーランド領土を帯状に獲得し、縮小され属国化されたポーランドにプロイセン領内のポーランド人を追放するとともに、帯状地帯には

遙か昔からロシアに植民しているドイツ血統の農民を移住させ、併せて軍の演習地も確保しようという構想である。これはスラブ世界に対する安全保障上の要請と、ポーランド人問題の解決、さらに農本ロマン主義的民族性強化という、いわば一石三鳥を狙ったものである。ここでは従来あまり知られていない〈オーバー・オスト〉の軍政について、V. G. リューレヴィシヤスの研究を参考にふれてみたい。

ドイツ軍勝利の後、ポーランドにはワルシャワ総督府が敷かれ文民行政が発足した。しかしラトビア西部（クアラント）からリトアニア、ポーランドのビャウイストク・グロドノにかけては、軍事支配体制、〈オーバー・オスト〉が成立した。その管轄する面積は10万8808平方キロメートルで、今日のイギリス国土の約45パーセントに当たる広さを持ち、スラブ系の多民族集団からなる約300万の原住民（リトアニア人、ユダヤ人、ラトビア人、ポーランド人、ウクライナ人、白ロシア人、タタール人など）を擁していた⁽⁶³⁾。Ober Ostというのは、Oberbefehlshaber Ost（東方軍最高司令官）による支配行政とその支配地を意味する。その本部はリトアニアのコヴノ（カウナス）に置かれ、本部には政治局を軸に、警察、広報、財務、交通、農務、教会・学校、営林、司法、郵便、貿易などのセクションが設置された。全体はクアラント、リトアニア、カウナス、ビリニユス、グロドノ、ビャウイストクの6行政区に分割され（その後3つに統合）、さらにそれぞれの内部で行政は、プロイセン地方行政を模範に細分化された。

その崩壊に至るまで、オーバー・オストでは約1万—1万8000人の軍人や文民が官僚行政を担当した（東部戦線には年平均130万人のドイツ兵が動員されていた）⁽⁶⁴⁾。これまで官僚制支配など知らなかったロシア大地に、初めて近代的行政機構が導入されたのである。またこれほど広大な空間をドイツが支配した経験は、プロイセンによる18世紀のポーランド分割以来のことである。この軍政確立のイニシアティブをとったのは、無能な老司令官ヒンデンプルクではなく、市民階級出身のルーデンドルフ将軍



オーバー・オスト国家—主要な行政区域

V.G.Liulevicius, War Land on the Eastern Front, p.60.



ドイツ軍が1918年までに進軍した最大範囲
 V.G.Liulevicius, War Land on the Eastern Front, p.207.

であった⁽⁶⁵⁾。かれは1915年秋から軍政の確立を開始し、1916年8月にヒンデンブルクとともに帝国の第三次軍最高司令部（OHL）を委ねられベルリンに去るまでオーバー・オストの指揮を執った。

ルーデンドルフは『わが戦時回想』において、「1916年7月末にわたしがここを去るまでに、われわれがここで共に達成した仕事は、偉大で見事な、ドイツ人にふさわしい所業であった。それは軍や故国だけでなく、この地域やそこに住む住民の利益にも奉仕するものであった」などと自画自賛している。しかし実際は、それはドイツ人によるドイツ人のための支配であった。

東プロイセンや西プロイセン、ポーゼンさらにポメルン [いずれもプロイセン王国東部の州一谷] を合わせたような広大な領域において、われわれは全く巨大な課題に直面した。すべては新しく組織せねばならず、構築せねばならなかった。まずもって、軍の背後に安寧秩序を保証し、敵の諜報活動を排除せねばならなかった。この国はこの国自身で扶養されねばならず、さらに軍や故国への食料供給のために、また軍やわれわれの戦争経済に必要なその他の備品のために利用されねばならなかった。敵に包囲されたわれわれの経済状況からして、これは有無を言わせぬ義務となった⁽⁶⁶⁾。

戦争とともに開始された英国の海上経済封鎖と予期せぬ戦闘の長期化によって、ドイツの食料、燃料、原料、労働力の不足が懸念されていたから（1916年冬からは決定的に悪化し、国民の厭戦気分が増大し、労働強化と低賃金に抗議するストライキも組織され始めた）、ルーデンドルフが告白しているように、オーバー・オストの任務はまず何よりも占領軍の自給自足体制の確立であり、さらに本国で深刻となった食糧等の不足を支援することである。と同時に、オーバー・オストのユートピアは、この地にドイツ民族の東方要塞を建設し、列強の経済封鎖にも耐えうる生存圏を樹立す

ることに向けられた⁽⁶⁷⁾。そのために取られた手段は、現地住民からの徹底した収奪であった。リトアニア地区だけで、占領期間中に、馬9万頭、牛14万頭、豚76万7000頭が徴発され、7730万ライヒス・マルクの財貨投入に対して、換算すると3億3860万ライヒス・マルクの多種多様な資源（農産物、材木など）が収奪された⁽⁶⁸⁾。こうした収奪資源によって、食品加工、パルプ、製材、火薬など様々な工場が立ち上げられ、広大な領土の交通網の整備が開始された。だがそれを支えたのは原住民の強制労働（1916年中期から）である。また住民には人頭税や間接税が科せられた。住民の生活水準（栄養、健康、衛生）はこれまで以上に悲惨なものとなり、1916 - 17年冬にはビリニュス市だけで数千人の餓死者を出した。逃亡者も増加し、強盗団が横行し、住民の不満も高まったから、必然的に軍政による暴力支配も強化された。にもかかわらず1916年11月には、ベルリンでオーバー・オストの農産物展示会が開催され、軍政の輝かしい東方経営が国民に宣伝されたのである。

こうした軍政についてルーデンドルフと指導部は、現地の〈ドイツ化事業（Deutsche Arbeit）〉という正当化イデオロギーを編み出した。たしかにドイツ軍が到着したとき、多くの兵士は初めて目にする東方の土地とスラブ系住民の生活に、ドイツの文明、秩序と衛生を対比して、戦災による荒廃のみならず、そもそも獸的、不潔、荒廃、無秩序、疲弊という、一言でいえば「歴史以前」の印象を受けた。ドイツ化事業とはかれら原住民にドイツ文化を伝授することであった。たしかにその支配は、ユダヤ人を絶滅し、スラブ人を奴隷民族にするというナチズムの支配ほど過激ではなかった。しかしオーバー・オストの支配は、ドイツ人の〈支配民族（Herrenvolk）〉意識を高め、スラブ民族への蔑視を育んだことは間違いない。かれらの目からすれば、東方はドイツの指導の下に形成されるべき抽象的空間（Raum）となった。もしこの国と住民に文化と秩序を与えることができれば、ここは「小麦や家畜、木材や羊毛」の産出地となり、クーアランドは、大地のゲルマン化にふさわしいドイツ農民の理想的入植地に

なるだろうというわけである。

もう一つ重要な点は、ドイツの東方拡大とともにドイツ国民は、忘却の彼方にあったロシアにおけるドイツ人、在外ドイツ人（Auslandsdeutsche）の存在を発見したということである。ロシア領内のバルト地域には、12－15世紀のドイツ騎士団や刀剣騎士団の支配以来、ロシア皇帝の臣民かつ地域の支配階級であるドイツ血統の土地貴族が存在していた。さらに18世紀以来、自身がドイツ人だったエカテリーナ女帝の政策によって、ボルガ河流域などには多くのドイツ農民が入植していた（ボルガ・ドイツ人）。かれらはツァー体制による戦時の迫害を経験し、ドイツ軍の輝かしい侵攻に魅了された。バルト・ドイツ人がドイツの支配行政に協力を開始するとともに、農民もドイツ支配地への帰還を希望し、じっさい1916年4月には約2万人のポリン・ドイツ人が本国への帰還を開始した⁽⁶⁹⁾。こうした事態は、かねてより在外ドイツ人を占領地に入植させ、民族性強化に利用しようとしていた全ドイツ主義者を鼓舞するものであり、また帝国指導部もこれを戦後計画のなかに算入し始めたのである。

しかし結果的にみれば、にわか作りのオーバー・オストの実験は成功だったというわけではない。全体としてみれば、敗戦以前に、ルーデンドルフが去ってから「オーバー・オストは、恒常的な組織再編成、命令や規制の不規則な氾濫、従属関係の混乱、責任の重複、制度的競合関係、権限の乱用、任意かつ計算された不当な権力行使によって、内部から破壊」⁽⁷⁰⁾して行った。上からのドイツ化事業は結局、戦時の組織的混乱のなかで挫折し、住民に多大な犠牲を強いて終焉した。しかしそうではあっても、「ルーデンドルフ王国」⁽⁷¹⁾のユートピアは、ベルリンの農産物展のみならず、例えばヴェルトハイマー（F. Wertheimer）の『ヒンデンブルクの東方城壁（Hindenburgs Mauer im Osten）』（1915）やブレーデリッヒ・クーアマーレン（S. Broederich-Kurmahlen）の『新しい東方国（Der neue Ostland）』（1915）のようなイデオログによって美化され、国民の間に東方ドイツ植民の夢を掻き立てたのである。F. マイネッケのような自由

一保守派の歴史家もある私信のなかで、ラトビア原住民が追放されれば、クーアラントはドイツの理想的な田園コロニーとなるだろうなどと述べている⁽⁷²⁾。ヒトラーの東方志向はこうしたユートピアの残像なしには考えられない。ルーデンドルフはその回想録において、もちろんヒトラーの東方支配を予見したわけではないが、次のように述べている。

ドイツ化事業は喪われてしまったわけではない。それは戦時には、故国にとっても軍隊にとっても、さらにこの国自体にとっても、とにかく有益なものであった。ドイツ化の種子がまだ大地に留まっているかどうか、そしてそれが後に実を結ぶかどうか、それはわれわれの厳粛な運命に向けられた問いであって、後世のみが答えることができるのである⁽⁷³⁾。

ドイツの東方支配にとってさらに特筆すべきは、1917年のロシア11月(ボルシェヴィキ)革命、それに続く1918年3月のブレスト・リトフスク(独露講和)条約、8月の追加条約である。これによってドイツはオーバー・オストどころではない、目も眩むような広大な領土を獲得した。かくも大規模な領土獲得を外務省の抵抗をもともせず主導し、ロシアに強制したのは、ベートマン-ホルヴェーク辞任後、独裁的権力を行使した軍最高司令部のルーデンドルフ將軍ら強硬派である。獲得領土は今日のバルト三国、ポーランド、ルーマニア、ベラルーシの大部分を含み、さらにフィンランドとウクライナを従属国として包摂するものである。ドイツの支配はバルト海沿岸から黒海のクリミア半島にまで拡大し、その先にはコーカサスからトルコ、さらにバクダッド鉄道計画以来煽られてきた近東への展望が開かれていた。ロシアは100万平方マイルの領土と5000万の住民(人口の34パーセント)を失ったが、そこには、ロシアの炭鉱の89パーセント、産業の54パーセント、鉄道網の33パーセント、農地の32パーセントが含まれていた⁽⁷⁴⁾。ロシア革命政府は存亡の危機に陥ったといつてよい。

軍最高司令部はバルト・ドイツ人だけでなく、フィンランドやウクライナ、グルジアなどの民族主義者と形式的な協力関係を結んだが、それは支配のカムフラージュ以外の何物でもなかった。ドイツ国内では、逼迫した食料や原料の調達（収奪）への期待が膨らむとともに、新しい東方田園コロニーへの入植熱が一挙に沸きあがった。プレスト・リトフスク前夜、ドイツ内務省はバルト地域にロシア在住ドイツ人を含む7万—9万の農家を入植させる計画を立て、半官半民の不動産会社も設立された。1918年5月には、帰還ドイツ人（Rückwanderer）の入植を促進するために帝国移住局（RWS）が設立され、宰相官房は委員会を招集し、在外ドイツ人の状況調査のために、ロシアから獲得した領土にくまなく調査団を派遣した⁽⁷⁵⁾。

たしかにこれはわずか8カ月ほどの白昼夢にすぎない。しかしそれはヒトラーの東方志向に決定的なインスピレーションを与えるものであった。ヴェーラーは次のように述べている。

1918年夏に一時的にせよ存在した東部の情勢をまざまざと思い浮かべてみるならば、ヒトラーのロシア政策の目的は、異人としてドイツ史に乱入した空想家が夢みた誇大妄想などでは決してなく、当時かれの世代がかつて一度経験した状況を、極めて具体的に引き継いだものという印象を与えるのである⁽⁷⁶⁾。

Ⅲ ヒトラーとドイツの東方支配

1. オポチュニストかプランナーか？

ヒトラーが1933年1月に権力を獲得してから、一連の外交や戦争を通じて何を目標としていたのかについて研究者の間に論争があった。後にヒトラーと袂を分かったダンチヒのナチ党政治家ラウシュニングは、ナチズム

は「永久革命」(後にニヒリズムの革命)であり、ヒトラーの政策はただ権力のために権力を求めるものであると述べた。ここから現れるのは、内政においても外政においても「原則なきオポチュニスト」ヒトラーという像であって、A. バロックも優柔不断な側面を強調したヒトラー伝を著した(後の版で若干修正)。またA. J. P. テイラーは、ヒトラーがヴェルサイユ体制の打破とドイツの大国的地位をめざしただけであり、シュトレゼマンと本質的に変わらない通常の権力政治家であるとした。世界大戦はいわば「国際関係の交通事故」のように生じたのであり、ヒトラーの意図するところではなかったというのである。そうなればラウシュニングのいうように、ヒトラーの反ユダヤ主義も機能的な統合イデオロギーにすぎないことになり、ここからヒトラーは「強いられた戦争」をしただけで、ユダヤ人絶滅政策にも関与せず、ホロコーストはH. ヒムラーと親衛隊の陰謀であるとするD. H. ホーガンの説までは一步の違いにすぎない⁽⁷⁷⁾。しかし今日では、ラウシュニングの『ヒトラーとの対話』はラウシュニング自身の創作にすぎないこと、テイラーはヒトラー自身の言説を無視し、重要資料(例えば『ホスバツハ議事録』)を否認したうえで偏った資料(おもにドイツ外務省の伝統的外交官の文書)に依拠していること、さらにホロコーストがヒムラーの独断ではありえないことなどは、すでに多くの研究者によって指摘されている。

こうしたオポチュニスト説に対して、H. R. トレヴァー-ローパー、A. ヒルグラーバー、K. ヒルデブランド、E. イエッケル、J. ティースらは、ヒトラーに確固たる世界観とそれを実現するための「プログラム(綱領)」ないし「計画」が存在していたことを解明した⁽⁷⁸⁾。ヒトラーは『わが闘争』を完成した頃から、Iでも述べた世界観をベースに、アーリア人種の世界帝国への野望(その規模が世界的かヨーロッパ大陸内に留まるかは議論が分かれるが)と狂信的な反ユダヤ主義とを接合した独自の政治構想を確立した。と同時にヒトラーは政権獲得後、戦術的柔軟性を保持しつつも、その政治コンセプトを段階的に実現する計画(戦略)にまで練り上げ、それ

を実行に移したのである。

またヒトラー国家が一枚岩ではなく、諸機関の間で、また行政幹部たちの間で紛争の絶えない多元的国家であり、ヒトラーは弱い政治指導力しか発揮できなかったという説が、M.プロシャートやH.モムゼンらによってなされている⁽⁷⁹⁾。たしかにこの観点は第三帝国の内政に関する限りほぼ正しい。ナチ党の権力掌握とともに推進された「強制的画一化（Gleichschaltung）」によって、既存の国家諸機関と新参の党幹部の間で様々な摩擦が生じていた。これに加えて官僚制を嫌うヒトラーは、カリスマ的指導者として一定の幹部に特定の全権を付与したため、かれらの間での指導権争いが一層激化したのである。そのさい第三帝国の内政改革や諸幹部間の権力闘争にヒトラーはなかなか介入せず、決断を引き延ばした。しかしこうした紛争はたしかに非効率ではあったが、同時にナチ国家のエネルギー源ともなり、また調停者としてのヒトラーの存在価値を高めた。そして、こと外政や軍事の戦略、それに関連する諸措置についていえば、ヒトラーは重大な局面で断固として自分の意志を貫徹した。そして1941年の対ソ開戦前までは、ヒトラーの外交、軍事政策は一か八かの賭けにおいてもおおむね成功を博したのであって、その分野でのヒトラーのリーダーシップは軍首脳や党幹部、上級官僚たちにも承認されていたのである。内政が多頭多元的であったことと、外政、軍事においてヒトラーが強い指導者であったことは矛盾しない。わたしはヒトラー＝綱領主義者という立場から、さらにいえばヒルゲルバーやヒルデブランドのいう「段階的計画」の見地から、ヒトラーのオリジナルかつ不動のプランについて述べてみたい。ヒトラーを援助した右派勢力もよく認識していなかったことだが、『わが闘争』は戦前右翼の遺産から出発しつつもそこからの決別を宣言する書物であり、ヒトラーの政治プログラムはドイツ帝国の枠を突破した、独特の世界史的使命に基づくヨーロッパの、さらに世界の革命であった。

2. ヒトラーのプログラム

ヒトラーは『わが闘争』や『第二の書』において、まだ「計画」とはいえないにせよ、己の政治・外政コンセプトをほぼ完成された形で述べた(1925-28年)。その後ヒトラーは徐々に、そのコンセプトを実現する戦略と「計画」を練り上げていったのである。といってもヒトラーは戦後ただちにその構想に至ったわけではない。ヒトラーは1919年から1922-3年に至るまで、右翼の演説者としての地位を築いていたとはいえ、独自の政治展望や外交指針を有していなかった。1920年2月にヒトラーも関与して作成されたナチ党(国民社会主義ドイツ労働者党)綱領をみても、社会主義的アクセント(利子奴隷の打破)や反ユダヤ主義はあるものの、その政治構想の基本はヴェルサイユ条約で禁じられた大ドイツ主義(ドイツ民族の結集と拡大)と領土(植民地)拡大であり、その射程は全ドイツ連盟や敗戦末期のプレ・ファシスト政党、〈ドイツ祖国党(Deutsche Vaterlandspartei)〉⁽⁸⁰⁾に結集した右派政治勢力の範囲内にある。ドイツがヴェルサイユ条約の桎梏を打破し、再び世界強国をめざさねばならないという認識は、たしかに保守派やヒトラーを含めた右翼ナショナリストの共通理解であった。

ドイツの世界強国化はもちろん帝国主義者ヒトラーの基本的立場である。しかしヒトラーは視野の狭い国粹主義者と異なり、現在のドイツはどこかと同盟を結ぶことによってしかヴェルサイユ条約体制を突破できないことを認識していた。そしてクーンの研究によればヒトラーは1919年から21年まで、パートナーとして英国を選ぶかロシアを選ぶかを決めかねていたのである⁽⁸¹⁾。ヒトラーは当初、ロシアで共産主義の支配が確定するとは思っていなかった。ヒトラーの認識ではこれまでの帝政ロシアの支配層は移住したゲルマン民族によって担われてきた⁽⁸²⁾。ヒトラーが同盟者としてのロシアを断念したイデオロギー的要因として、すでに述べた『シオン賢者の議定書』、それをヒトラーたちに普及したA. ローゼンベル

クの影響を挙げることができる。ここからヒトラーは、解放され市民階級となったユダヤ人が西欧では金融資本を手中に収め、民主主義を利用して完全な支配の前段階に達するとともに、東方ではボルシェヴィキ革命のなかでゲルマン血統の指導者を絶滅することによって、完全なユダヤ人支配を実現し、両者相まっていよいよ世界支配の陰謀を実現しつつあるという強迫的信念を固めて行ったのである⁽⁸³⁾。ヒトラーの外交構想はその創成からして、反ユダヤ主義イデオロギーと不即不離の関係にあった。

かくしてヒトラーは、戦火を交えたばかりの英国を（さらに大戦中ドイツを見捨てたイタリアも）パートナーに選んだ（『わが闘争』第二巻第13章）。この点でヒトラーは、英国を最大のライバルとみなす全ドイツ連盟や当時のドイツ右翼勢力とは異なった立場に立った。クーンによれば、ヒトラーがこうした方向設定に達したのは、1922 - 23年である⁽⁸⁴⁾。ヒトラーの考えではフランスはドイツの不倶戴天の敵であり、人種混交の墮落せる国家であるから、いずれは再起不能なまでに叩き潰し、ドイツのヘゲモニーを拡大しなければならない。しかしその場合でも、英国の国家目標が海上帝国であり、その大陸政策が勢力均衡である限り、イギリスはフランスの覇権やロシア・ボルシェヴィキの危険に対抗するためにもドイツとの同盟の可能性をもつはずである。要はドイツがその目標を東方内陸に定め、海上覇権を脅かすつもりがないことを英国に充分理解させることである。そのうえ人種イデオロギーからしても、ヒトラーにとってイギリスはアングロサクソン民族という点で、スカンジナビア半島の諸国民同様、ドイツと同じ北方=優秀人種の一部である。ヒトラーは、英国指導部がその国家利益を自覚しており、ユダヤ人の陰謀に対抗する力をまだ保有していると考えた。

こうしてヒトラーの主要ターゲットはソビエト・ロシアとなった。その意味では1941年6月の〈バルバロッサ作戦〉にこそ、〈生存圏〉と〈反ユダヤ主義〉というヒトラーの全思想がかかっていたのである。ヒトラーによれば、ドイツは毎年90万の人口増大があり、領土、それも旧帝国の範

圏を遥かに超える〈生存圏〉を確保せねばならない。それはドイツ保守派がめざしている旧ドイツ帝国の図版の再興では全く不十分であり、肥沃なウクライナを含む広大なロシア領土によってのみ可能である。ヒトラーは海外植民地や建艦闘争で英国と対立し、「国家的ミイラ」と化していたオーストリアと組んで大戦に突入したかつての帝国指導部を激しく批判した。ヒトラーは、多くの同胞の流血の上に築かれたこれまでの全ドイツ史を総括し、ドイツ人の〈生存圏〉の拡大という観点から、その成果は次の三点だけであると断言する。それは、「1. おもにバイエルン部族によって実現されたオストマルクの植民」、「2. エルベ川以東の地域の獲得と侵略」、「3. ホーエンツォレルン家によって実現された、新しい帝国の模範であり結晶核としてのブランデンブルク・プロイセン国家の組織」⁽⁸⁵⁾である。すなわち歴史的にみてドイツ史の進路は第一次大戦前の帝国主義者が主張し、今なお旧右翼が夢みているような海外進出ではなく、つねにヨーロッパの東方内陸に向けられており、そのために必須の国家形態は、英国のような海軍国家ではなく、東方開拓者としてのプロイセン陸軍国家であったのだ。

われわれがヨーロッパで土地と領土を欲するならば、それは大体のところロシアの犠牲によってのみ行われることができた。そうであるからには、新しい帝国はドイツの剣によって、ドイツの鋤には耕地を、しかした国民には日々のパンを与えるために、ドイツ騎士修道会の騎士たちが歩んだ道を、再び行進せねばならなかったのである。

かかる政策のためには、当然のことだがヨーロッパでただ一つの同盟国があった。それは英国であった。(中略)

英国と組んでのみ、背後を守られることによって、われわれは新たなゲルマン人の行進を開始することができたのである。われわれがそうした行進を行う権利は、われわれの祖先がもっていた権利と比べて小さいとはいえなかったであろう⁽⁸⁶⁾。

われわれはドイツ人が600年前に到達、静止した地点から出発する。われわれはヨーロッパの南方や西方へのゲルマン人の極めて長期にわたる行進を止め、東方の国に視線を向ける。われわれは戦前の海外植民—貿易政策をようやく終結させ、将来の領土政策へと移行するのだ⁽⁸⁷⁾。

しかしとりわけ、ヨーロッパにおける領土政策によってのみ、外部に流出した人びとを、その軍事的利用を含めてわれわれ民族に確保することができた。ヨーロッパで50万平方キロメートルの領土があれば、数百万のドイツ農民に新たな安住の地を提供できるし、いざという時はドイツ民族に数百万の兵士を供給できるのである。

そうした領土政策にとって、ヨーロッパで問題となる唯一の地域はロシアであった。東方でドイツに隣接し、入植者の少ない西部周辺地域は、かつてドイツ入植者を文化伝播者として歓迎してきたのであるが、ドイツ国民の新しいヨーロッパ領土政策にとっても考慮すべき対象となった。そうであれば、ドイツ外交の目標は、英国に背を向けた態度を解除し、逆にロシアをできる限り孤立させることであらねばならなかった⁽⁸⁸⁾。

英国の海上帝国、海外植民地支配（とイタリアの地中海沿岸での覇権）を承認したうえで、ドイツはヨーロッパ大陸、それもとくに広大なロシアの領土に大帝国を樹立すること、これこそ1924—25年以来、ヒトラーの政治構想の核心であった。「英国にとってはインドだったものが、われわれにとっては東方空間ということになる。」⁽⁸⁹⁾そして全ドイツ派の〈中欧〉コンセプト、その農本主義イデオロギーを引き継ぐヒトラーにとって、『食卓談義』でたびたび触れられたように、来るべきヨーロッパ大陸帝国は健全なドイツ農民階級の支柱に支えられたものでなくてはならない。東方〈生存圏〉は西方の都市化と産業化に伴って生み出された拝金主義や不健康、風俗の墮落に対して、ドイツ精神の精髓である農民の活力を再生させる場でもある。またヒトラーの人種イデオロギーからして、それは決し

て人種混交の悪に染まってはならず、生粋のアーリア人種の支配する黄金郷でなければならなかった⁽⁹⁰⁾。

しかるにヨーロッパ東方には数百万のユダヤ人がおり、億単位のスラブ人が居住していた。ゲルマン人の新帝国がこうした文化破壊者や劣等民族によって汚染されることは、ヒトラーにとって何としても許されないことである。かつて全ドイツ連盟会長のH. クラースは、第一次大戦におけるドイツの東方支配を念頭に〈民族主義的耕地整理 (völkische Feldbereinigung)〉のコンセプトで、スラブ民族やユダヤ人の支配地からの追放とドイツ農民の入植を提案していた⁽⁹¹⁾。ヒトラーはこの案を格段に凶暴化する。1941年の〈バルバロッサ作戦〉において、ヒトラーは国防軍や親衛隊をあらゆる戦時国際法的、人道的拘束から解き放った。それは事実上、スラブ系住民とユダヤ人に対する即時射殺許可であり、後のホロコーストの端緒である。対ソ戦はヒトラーの頭のなかでは、18世紀以来の〈西欧国家システム〉における通常の戦争ではなく、第一にドイツ民族の〈生存圏〉獲得のための戦争であり、そこには東方スラブ民族をドイツ人支配者の奴隷と化すことが含まれるとともに、第二にそれはユダヤ人の世界支配の陰謀への反撃としてユダヤ人の〈絶滅戦争〉であって、そもそも両者は不可分なのである⁽⁹²⁾。ヒトラーによれば人は住民をゲルマン化することはできず、ただ土地のみをゲルマン化できるからだ。

ヒトラーをオポチュニストではなく綱領主義者と捉えてナチズムの政治構想を分析したトレヴァー・ローパーやイエツケルは、ヒトラーの最終目的がこれまで述べたロシア支配とヨーロッパにおける大ドイツ帝国の建設であると述べた。しかし同じ綱領主義の観点に立つヒルゲル-バーやヒルデブランドは、前者の観点を遥かに超えて、ヒトラーが究極的には世界支配を構想し、それを実現するための「段階的計画 (Stufenplan)」を熟成させていたことを明らかにしている。それは細部にこだわらずに言えば次の三段階である。第一段階は、英国と協調してフランスを打倒、さらにロシアの征服を実現し、ヨーロッパ大陸に大ドイツ帝国の基礎を築くこと

である。これはトレヴァー・ローパーやイエッケルの主張に相当する。その前半においてドイツのヘゲモニーを強化する段階までは、ヒトラーと伝統的保守勢力はほぼその目標を等しくしていた。しかしまた、この段階が完了する場合、権力政策と組み合わせられたヒトラーの人種イデオロギーからして、ヨーロッパはユダヤ人のいない（judenfrei）世界になっていなければならない。第二は、ヨーロッパ大陸を支配する大ゲルマン帝国が英国や日本との同盟を基軸に、大艦隊をもって北アフリカ、大西洋、インド洋に出撃し、最後のライバルであるアメリカ合衆国と対峙し、その後におそらくはヒトラーの次の世代によって雌雄が決せられる段階である。そして最終段階はユートピアといってよいが、そこで初めて完全なゲルマン人種による世界支配が展望されることになる。したがってヒルデブラントやヒルグラーバーによれば、ヒトラーは第二段階の半ばまでを存命中に実現しようとしたのである⁽⁹³⁾。

とはいえヒトラーが政権を掌握した当時、ヒトラーの政治構想や「段階計画」を真に受けた人はほとんどいなかった。『わが闘争』を読んだとしても、人はそれを過激な反ユダヤ主義同様、ヒトラーの大言壮語にすぎないとみなしていた⁽⁹⁴⁾。軍や官僚団、産業界の支配階級、そして何より国民大衆も、生活の安定や旧ドイツ国境の回復を望んではいたが、第一次大戦の敗北と世界恐慌の記憶が残るなかで、必然的に総力戦となる侵略戦争など全く望んではいなかった。しかしヒトラーの構想は国防軍を始めとする第三帝国の指導部に次第に明らかになって行った。ここではその代表的な事例を二つ挙げてみたい。ヒトラーは政権獲得直後の1933年2月、その興奮冷めやらぬなかで国防軍将軍たちを前にして、宰相としてその危険な政治構想の片鱗を初めて開陳した。そこでヒトラーは、内政上の課題としてマルクス主義や平和主義を根絶することや国民の戦闘精神の育成、移住による健全な農民階級の形成などを挙げ、外政上の課題としてヴェルサイユ条約体制を打破すること、さらに牙を抜かれた国防軍を再建することなどを挙げた。ここまでであればおそらく将軍たちも異論がなかったであら

う。しかしヒトラーはその後で来るべきドイツの進路として、「東方における新しい生存圏の獲得とその情け容赦なきゲルマン化」を付け加え出席者を驚かせたのである⁽⁹⁵⁾。さらに国内体制が安定してきた1937年11月、ヒトラーは国防軍や政治指導部の少数首脳を前にして、初めて武力によって東方にドイツ民族の巨大な〈生存圏〉を拡大するという方針を、具体的な期限付き（遅くとも1943-45年、フランスの政情によってはその時点で）で示したのである。これがホスバッハ大佐によって筆記されたいわゆる「ホスバッハ議事録」である⁽⁹⁶⁾。それは第三帝国に協力してきた、国防軍や外務省などの伝統的保守派に深刻な衝撃を与えた。これに対してヒトラーは軍首脳や外相の更迭によって応え、いよいよ固有のプログラムを実行に移し始めたのである。

しかしヒトラーは手を替え品を替えて英国と同盟を結ぶか、あるいは大陸の戦争への英国の中立を取り付けようとしたが、ついにその目標を達成できなかった。ヒトラーは英国との了解が難航し続けるなかで、1938年後半頃から、そして1939年3月の英仏によるポーランド独立保障宣言によって決定的に、英国を力づくで屈服させる決意を固めざるを得なくなり、その機会をとらえて同時に東西両面戦争の遂行を決意することになった⁽⁹⁷⁾。その意味ではヒトラーは当初の「計画」を変更せざるを得なくなったのである。ヒトラーは、ポーランド侵攻のためにスターリンとの戦術的合意、独ソ不可侵条約を結んだ。その裏条約によればポーランドは独ソで分割されることになっていた。しかしポーランド攻撃に着手する数日前（1939年8月25日）になっても、ヒトラーは英国大使に、ポーランド問題が解決すれば、ドイツは英国に包括的で大規模な和解提案をしたいと申し出ている⁽⁹⁸⁾、ポーランド占領後もヒトラーは直ちに英国へ和平の提案を行っている。ヒトラーは旧プロイセン領だったポーランドを占拠しても、フランスはともかく、前年のミュンヘン会談でチェコスロバキアを得た時のように、英国は中立を守るかもしれないと淡い期待を抱いていた⁽⁹⁹⁾。その意味で英国のN. チェンバレンの宥和政策と反共路線は、ヒトラーに誤っ

たサインを送っていたといえよう⁽¹⁰⁰⁾。

ヒトラーの「計画」では、本格的な戦争はあくまでロシア攻撃だった。テイラーやホーガンの歴史修正主義とは内容が異なるが、ヒトラーはたしかに、1939年にはその意図に反して、英仏に対する大規模な大戦を余儀なくされたのである⁽¹⁰¹⁾。そしてヒトラーがフランスとの戦闘に決着（1940年6月）をつけ、1941年6月に対ソ戦に着手したとき、それはボルシェヴィキを打倒しユダヤ人のいないドイツの東方空間を求める、文字通り〈ヒトラーの戦争〉ではあったが、「プログラム」上で長年追求してきた英国との協調を欠いていた。しかしヒトラーはなお、ソ連を征服すれば、戦略的にみて今度こそ英国に譲歩を迫り、本来の「計画」に戻れるのではないかと期待していた⁽¹⁰²⁾。それはまさしく乾坤一擲の大博打であった。したがってソ連に対する電撃戦が失敗に終わったとき（1941年冬）、ドイツ帝国主義の遺産である〈世界帝国〉か〈没落〉かの危機意識を秤に掛けたヒトラーの運命は、確実に後者へと傾斜していったのである。ヒトラーの重要な軍事的助言者であったヨードル（A. Jodl）将軍が追想したように、1942年夏の再度の東部大攻勢がまたしても失敗に終わったとき、ヒトラーはもはや勝利は喪われたことを認識したのである⁽¹⁰³⁾。それ以降、S. ハフナーの言葉を借りれば、歴史の舞台で「政治家ヒトラー」は退場し、代わって「大量殺戮者ヒトラー」が姿を現すことになる⁽¹⁰⁴⁾。

3. ヒトラーの東方政策の起原

ヒトラーの東方戦争には、ボルシェヴィキ＝ユダヤ人の殲滅というイデオロギーと、ロシアの大地に〈生存圏〉を確立するというアイデアが組み合わされていた。前者のイデオロギーはおもに『シオン賢者の議定書』からきた。それでは先に『わが闘争』から引用した東方〈生存圏〉⁽¹⁰⁵⁾という構想は、いったいどこからきたのであろうか。わたしはヒトラーの東方政策の起源を探る場合、次の三点がもっとも重要であると思う。ヒト

ラー東方政策の起原をもう少し掘り下げてみよう。

第一に挙げなければならないのは、シェーネラーやクラスをはじめとする汎(全)ドイツ主義の影響である。それはドイツ民族の結集をめざす(オーストリアなどのドイツ人を含む)大ドイツ主義であり、排外(自民族中心)主義と世界強国への膨張主義を伴っている。そして全ドイツ主義は、すでに触れたとおり、徐々に海外膨張路線から、その視線をヨーロッパ内陸植民へと、すなわちポーランドやドナウ河領域など、東方、東南へと向け始めた。同時に〈中欧〉コンセプト、すなわち中央ヨーロッパに自給自足可能な経済圏を建設する構想が登場してきた。そして第一次大戦中、全ドイツ連盟会長のクラスが掲げた戦争目的は、ドイツ軍の東方での勝利に刺激され、ヒトラー以前にドイツがロシアへと勢力を拡大することを主張し、さらに凶暴性においてヒトラーに劣るとはいえ、ドイツ民族性強化の手段として、「民族主義的耕地整理」(ユダヤ人やスラブ人の追放と東欧に散在するドイツ人の東方移住)さえ提案していた。多くのヒトラー研究者が指摘するのとおり、第一次大戦後から1923年のミュンヘン一揆ころまでは、扇動者として名をなしたヒトラーの言説は、ほぼ全ドイツ主義者の射程内にあった。したがって、『わが闘争』に表れたヒトラーの東方志向の背後には、クラスら全ドイツ主義の政治コンセプトがあったことは明らかである⁽¹⁰⁶⁾。ヒトラーと全ドイツ主義者の関係は、ミュンヘン一揆までは良好なものであった。

第二に、1916年からの〈オーバー・オスト〉によるバルト地域支配、さらに1918年3月のブレスト-リトフスク条約によるロシア領土の獲得が、見逃すことのできないポイントである。すでに述べたことだが、ドイツはこの条約によって、ポーランド、バルト諸国、フィンランド、ウクライナなどの広大な地域を支配下に置いた。ヒトラーがこの点を自覚していたことは、ミュンヘン一揆以前にヒトラーが行った演説の自筆メモからも知ることができる。そこには次のように記されている。

ドイツの将来と現在の状態

1917 - 18年

植民地なきドイツ

ブレスト-リトフスクが確保するはずであったもの：

以下によるドイツ民族の扶養

I. 土地

II. 産業と貿易のための原料の確保⁽¹⁰⁷⁾

それでは、ヒトラーは、新聞などの報道以外に、大戦におけるドイツの東方支配の情報をどこから得たのであろうか。戦後ミュンヘン社会とヒトラーを研究したH. アウエルバッハによれば、そこにはルーデンドルフと二人のバルト・ドイツ人（何世紀も前からバルト海沿岸に入植したドイツ血統の人びとで、帝政ロシア時代には一定の特権を付与され、現地の支配階級を構成していた）の存在が浮かび上がる。ヒトラーは1921年春に当時学生だったヘス（R. Hess）の仲介で、第一次大戦の英雄ルーデンドルフ将軍とミュンヘンで会見し、将軍によって他の右翼有力者グループへのコネクションを得ることができた⁽¹⁰⁸⁾。ルーデンドルフはすでに述べたとおり〈オーバー・オスト〉の設立者であり、ブレスト-リトフスクの交渉においては強硬な独裁者として東方の巨大な成果の立役者であった。戦後ルーデンドルフは狂信的な反ユダヤ（反フリーメーソン）主義者となり、共和国政府に対する右翼反対派のシンボリック的存在だったのである。ヒトラーも当時、ルーデンドルフこそ来るべき民族主義運動のリーダーたる資格をもつとみなしていた⁽¹⁰⁹⁾。

またヒトラーのロシア認識に影響を与えたと思われるのは二人のバルト・ドイツ人である。一人はA. ローゼンベルクで『シオン賢者の議定書』とともに、ヒトラーに「ボルシェヴィキ革命＝ユダヤ人の陰謀」の確信を与えた。もう一人は、1920年11月以来ナチ党に加入し、ヒトラーの協力者となった工学博士ショイプナー-リヒター（M. E. v. Scheubner-Richter）

である⁽¹¹⁰⁾。ショイプナーは第一次大戦時にはトルコのドイツ領事館に将校として勤務したのち、〈オーバー・オスト〉の広報局長を務め、ミュンヘン一揆の隊列でヒトラーとルーデンドルフの間に立っていて銃弾に倒れた人物である（『わが闘争』第一巻は一揆の死者にささげられているが、そのなかにその名が見出される）。ショイプナーは多彩なコネクションの持ち主で、ヒトラーとルーデンドルフや右派の支援者との間を精力的に仲介した。リューレヴィシヤスも推測しているように、ナチ党の初期の支援者となったルーデンドルフとともに、ショイプナーはヒトラーにトルコでのアルメニア人大虐殺や〈オーバー・オスト〉の経験や東方支配、その可能性についての情報を伝えたと思われる。実際アウエルバハの研究によれば、ルーデンドルフの知遇を得るなかで初めて、ヒトラーはその主張に、東方への領土と土地への要求を掲げ始めたのである⁽¹¹¹⁾。東方の覇者であったルーデンドルフは、ヒトラーの東方志向への転換に、クラスら全ドイツ主義者に劣らず大きな役割を果たしたものと思われる。

さて最後に取り上げたいのは、全ドイツ主義者の東方志向やルーデンドルフの〈オーバー・オスト〉における〈ドイツ化事業〉に歴史哲学的根拠を提供した〈ドイツの東進運動（der deutsche Drang nach Osten）〉と呼ばれる19世紀の〈ドイツ・イデオロギー〉である。それはドイツでは19世紀以来、一般には「東方運動」、「東方移住」、「東方植民」、さらに「ドイツ化（文化）事業」、「東方への行進」などと呼ばれてきた。W. ヴィッパーマンは、さまざまなバリエーションを伴うこのイデオロギーの純粹形を次のように定義している。「‘ドイツの東進運動’という表現で示唆されているのは、ドイツ人が多かれ少なかれ無意識的に、制御や後退することのできない‘Drang（衝動、渴望）’に駆り立てられ、東方の近隣諸国へ浸透してきたということである。そのさい、‘ドイツ人’ないし‘ドイツ民族’は一つの有機的統一体として把握され、一様にすべて東方へと突き進む特性をもつと指摘される。」⁽¹¹²⁾ それは元来19世紀末からスラブ国民の間で、侵略者としてのドイツ人の危険性を表すネガティブ・スローガン

として使用され始め、やがてフランスの（普仏戦争の）報復主義者たちにも普及していった⁽¹¹³⁾。しかし同時に、ドイツ側でも19世紀後半のナショナリストの間で、ドイツ史の進路を遙か以前に遡り、すなわちハインリヒ1世、オットー大帝、ハインリヒ獅子王、ドイツ騎士団、さらにフリードリヒ大王からビスマルク（その後継者としてのヒトラー）に至る連続性において捉える観点が登場してきた。ドイツ・ナショナリストの東方志向もヒトラーの東方政策も、歴史思想としてはここに起原をもつのである。ただ単に権力政策上の必要性から、またそこにロシアがあったからという理由で、東方への道が開けたというわけではない。

すでに『わが闘争』の東方転換について引用した。そのさい注目すべきは、ヒトラーが千年以上のドイツ史の「究極の成果」として、バイエルン部族のオストマルクへの植民やエルベ河以東へのドイツ植民、また遙か東方のホーエンツォレルン家によるプロイセン国家の形成を挙げたことである。これらはすべて、中世の神聖ローマ帝国以来のドイツ人の東方への移住と植民、勢力拡大という歴史的事実に他ならない。そしてさらに、ヒトラーはドイツのこれからの進路として、600年も昔の「ドイツ騎士修道会の騎士」の歩んだ東方への道を挙げたのである。ロシアの犠牲の上にドイツ民族の広大な〈生存圏〉を獲得するのだというのである。ヒトラーがなぜ今さらドイツ騎士団の名を挙げたのかを考えると、当然そこには、ドイツの東方進出という〈歴史的事実〉と〈イデオロギー〉の影響が浮上してくる。

まず歴史的事実を確認しておこう。11世紀以来、ヨーロッパの生産力と人口の増大によって、ドイツを含むヨーロッパ人の東方への植民、移住が多くは平和的に進展し、スラブ世界とヨーロッパ世界との融合した独特の東欧文化圏が形成された。ドイツからの移住者は、北はバルト海沿岸から南は黒海沿岸に至る広大な地域に展開し、現地の農業生産を向上させるとともに、ドイツ的な都市を建設して現地の文化に貢献した⁽¹¹⁴⁾。しかし同時に、12世紀から開始された〈北方十字軍〉や14世紀からバルト海沿

岸部に進出した〈ドイツ騎士修道会（騎士団）〉は、異教徒の現住スラブ人に対する暴力的なキリスト教化活動を開始し始めた。そしてやがて騎士団は当時のポーランド王国内に独立したドイツ人国家を形成して、ドイツとスラブ世界の間に刺さった棘となった。このドイツ騎士団国家は、15世紀以後没落に向かい、ケーニヒスベルク（Königsberg）を首都とするプロイセン公国となったが、やがて17世紀にベルリンのブランデンブルク辺境伯であったホーエンツォレルン家に統合された。ここにブランデンブルク＝プロイセン国家の基礎が成立したのである。

先にも触れたように、19世紀になって汎スラブ主義や汎ゲルマン主義といったナショナリズムが台頭するにつれ、ドイツ人の東方進出、とくに東方に初めてドイツ人国家を形成した騎士団国家は、双方にとって事実の確認に留まらず、格好のイデオロギー論争の主題となった。19世紀半ば以降、ドイツの多くのナショナリスト歴史家は、とくに18世紀のポーランド分割を正当化する必要もあって、ドイツ人の東方移住という事実の上に、ドイツ人がスラブ世界への「文化伝播者」として東方を文明化したという自負を、さらにドイツ人のスラブ人に対する歴史的、文化的優越性を主張するようになった。文化と秩序なきスラブ人というステレオタイプも現れてくる。19世紀後半のこうした〈ドイツ・イデオロギー〉の代表格として、ベルリンのトライチュケとライプチヒのランプレヒト（K. Lamprecht）を挙げることができる⁽¹¹⁵⁾。ランプレヒトによれば、「東方の植民化」は、「われわれ国民の偉業」なのである。ドイツ人はもともと東方へ進出する渴望と使命をもち、それが歴史的権利であるとする意識が生まれてくる。暴力的なドイツ騎士団の支配も、東方文明化のミッションの名の下に正当化され、やがてはドイツの東方拡大の模範ともみなされるようになった。したがって〈der deutsche Drang nach Osten〉という言葉は、歴史学では中世以来のドイツ人の東方進出を表す事実命題としても使用されるが、同時にイデオロギーとして、「東方植民」や「東方運動」などととも、東方支配を正当化する意味をもつことになるのである。

トライチュケを生涯の師と仰ぐ⁽¹¹⁶⁾ 全ドイツ連盟会長クラスもその前任者ハッセと同様、やはり〈ドイツの東進運動〉イデオロギーを抱いていた。クラスは、1909年にアインハルトというペンネームで『ドイツ史』を出版した。1920年にベルリンでクラスに会見したさい、ヒトラーはこれを感じて読んだと伝えている⁽¹¹⁷⁾。そこにおいてクラスは、「ドイツ民族が達成した、その中世史上最大の事業は、東方の征服と入植である」⁽¹¹⁸⁾ とする立場から、明らかにトライチュケの『ドイツ騎士団国プロイセン』（1862年）を念頭に置き、スラブ側からは野蛮な支配者とされた騎士団国家を次のように讃えている。

重装備した1万2000人の騎士を中心に形成された、つねに戦闘可能な軍隊が領地を守備し、十字架のシンボルの下に駐留していた。堅固に組織された租税徴収は、騎士団国家に豊かな資金を提供した。騎士団の最盛期には、純税収入は、今日の貨幣で毎年600万マルクと見積もられる。当時としては途方もない金額である。

国中に堅固な城砦が散在し、不断の情報収集で連絡を取り合い、安寧と安全保障にあっていた。城塞には騎士たちが“支配者”として住み、その下に、永続的に軍務に勤務する比較的弱卒からなる守備隊がいた。戦争や緊急事態が発生したとき、また国内騒乱が生じたとき、誰もが武器を採ることを義務付けられていた。

よく組織され、見事に統治された国家の支配の下で、ドイツ騎士団国は、ドイツ国民の神聖ローマ帝国のなかで最も幸福で、最も満足すべき国となった。

ダンチヒ、トルン、ケーニヒスベルクのような、豪華絢爛たる教会と世俗の建築物からなる大都市が誕生した。巨大な堤防と排水設備によって、沼沢地は肥沃な耕地へと干拓された。ドイツ騎士団は、征服者、武装権力の担い手としてのみならず、豊かで美しい文化の創造者としても現れたのである。その文化は、かの時代の壮観な建築物に、そのもつと

も気高い表現を見出している⁽¹¹⁹⁾。

ヒトラーが『わが闘争』のなかで、ドイツの東方植民やドイツ騎士団について語ったとき、その念頭には、間違いなくトライチウケやランプレヒト経由の東方支配の原像が、マリエンブルクの騎士団の城が脳裏に浮かんでいたのである。クラースの描いた騎士団国家のイメージは、ほぼそれに重なるものであるといえよう。

- (1) G.Schöllgen/F.Kiessling, *Das Zeitalter des Imperialismus*, 5.Auf., München 2009, S.42.
- (2) A.a.O., S.54.
- (3) Bülow über Deutschelands Platz an der Sonne (1897), in: *Deutsche Geschichte in Quellen und Darstellung*, Bd.8, Kaiserreich und Erster Weltkrieg 1871-1918 Stuttgart 2000, S.270.
- (4) Hitlers Zweites Buch. Eine Dokumente aus den Jahr 1928, hg.v. G.L. Weinberg Stuttgart 1961, S.46. 『続・わが闘争』平野一郎訳(角川文庫、2004年)、18頁。(なお、『わが闘争』、『続・わが闘争』の訳文は、訳書のものと同じとは限らない。以下同じ。)
- (5) A. Hitler, *Mein Kampf*, Zwei Bände in einem Band, München 1943, S.148. 『わが闘争』(上)平野一郎・将積茂訳(角川文庫、1973年)、200頁。
- (6) H-U.Weher, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, Bd.3 : Von der Deuschen Doppel-Revolution bis zum Beginn des Erten Weltkrieges 1849-1914, 2Aufl., München 2006. S.1137.
- (7) W. Maser, *Adolf Hitler. Legende, Mythos, Wirklichkeit*, München 1971, S.236. 『人間ヒトラー』黒川剛訳(サイマル出版会、1976年)、239頁以下、301頁。I. Kershaw, *Hitler. 1889-1936 : Hubris*, New York 1998, p.17.
- (8) *Mein Kampf*, S.11. (上) 39頁。
- (9) E.Caudill, *Darwinian Myth. The Legends and Misuse of a Theory*, Knoxville 1997, p.66.
- (10) Op.cit., p.71. 135.
- (11) J. Sandmann, *Ernst Haeckels Entwicklungslehre als Teil seiner biologischen Weltanschauung*, in: *Die Rezeption von Evolutionstheorien im 19. Jahrhundert*, hg. v. E-M. Engels, Frankfurt a. M. 1995, S.331f.

- (12) H-G. Zmarzik, Der Sozialdarwinismus in Deutschland als Geschichtliches Problem, in: Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte (以下 VfZ と略記), Jg.11 (1963). H.3, S.249.
- (13) Mein Kampf, S.312. (上) 405頁。
- (14) Zmarzik, a.a.O., S.250.
- (15) A.a.O., S.265.
- (16) 人種衛生学については以下の研究をみよ。H. Conrad-Martius, Utopien der Menschenzüchtung. Der Sozialdarwinismus und seine Folgen, München 1955. R.N. Proctor, Racial Hygiene. Medicine under the Nazis, Cambridge 1988. S.Kühl, Die Internationale des Rassisten. Aufstieg und Niederlage der Internationale Bewegung für Eugenik und Rassenhygiene im 20. Jahrhundert, Frankfurt a.M. 1997.
- (17) したがってコンラート=マルティウスは、シャルマイヤーやプレッツを「≪人間的≫社会ダーウィニズム」として論じ、「≪反人間的≫社会ダーウィニズム」と区別している。H.Conrad-Martius, a.a.O., I-2,3.
- (18) ゴビノーについては次をみよ。長谷川一年「アルチュール・ド・ゴビノーの人種哲学」(1)(2) 同志社法学第52巻4,5号(2000-2001年)
- (19) Sandmann, a.a.O., S.337f.
- (20) G.L.Mosse, Toward the Final Solution. A History of European Racism. New York 1978, p.54.
- (21) ダーウィン進化論と特定の人種の優位を先験的に主張するイデオロギーとは本来両立しえない。これは、コンラート=マルティウスも指摘している。Conrad-Martius, a.a.O., S.283f.
- (22) Mosse, op.cit., p.107.
- (23) Mein Kampf, S.317. (上) 423頁。
- (24) A.a.O., S.324. (上) 421頁。
- (25) A.a.O., S.444. (下) 52-3頁。
- (26) A.a.O., S.434. (下) 41頁。
- (27) R.Rürp, Emanzipation und Antisemitismus. Studien zur《Judenfrage der bürgerlichen Gesellschaft, Frankfurt a.M. 1987, S.126.
- (28) A.a.O., S.135.
- (29) W.Marr, Der Sieg des Judentums über das Germanentum, 9.Aufl., Berlin 1879 S.15, 44, 46.
- (30) H.Berding, Moderner Antisemitismus in Deutschland, Frankfurt a.M. 1988, S.165-178.
- (31) Mein Kampf, S.335. (上) 436頁。
- (32) A.a.O., 339. (上) 441頁。

- (33) リーベンフェルスについては次をみよ。N.Goodrick-Clarke, *The Occult Roots of Nazism. Secret Aryan Cults and their Influence on Nazi Ideology*, New York 1985, p.90-。横山茂雄『聖別された肉体 ―オカルト人種論とナチズム』(白馬書房、1990年)ただし私は、一面科学の人であったヒトラーが人種神秘学を重視したとは思わない。
- (34) Berding, a.a.O., S.182.
- (35) *Mein Kampf*, S.357. (上) 463-64頁。
- (36) J.L.Sammons, Einführung, in: *Die Protokolle der Weisen von Zion. Die Grunlage des Antisemitismus - eine Fälschung. Text und Kommentar*, Göttingen 1988, S.19. またコーンの研究もみよ。N.Cohn, *Warrant of Genocide, The Myth of Jewish World Conspiracy and the Protocols of the Elders of Zion*, London (1967) 2005.
- (37) ローゼンベルク本は1933年までに、4版、2万5000部を販売した。J. L. Sammons, a.a.O., S.21. A.Rosenberg, *Die Protokolle der Weisen von Zion und jüische Weltpolitik*, 4. Aufl., München (1923) 1933.
- (38) *Mein Kampf*, S.337. (上) 438頁。
- (39) A.a.O., S.349f. (上) 454-5頁。
- (40) ヒトラーが挙げている3000万人の犠牲者というのは、『わが闘争』執筆時では多すぎる。コミュニズムの犠牲者問題については、谷喬夫「コミュニズムと政治思想―『コミュニズム黒書』の告発」『政治思想史』千葉眞編(三嶺書房、2002年)をみよ。
- (41) *Mein Kampf*, S.358. (上) 466頁。
- (42) A.Hillgruber, *Bismarcks Aussenpolitik*, 2Aufl., Freiburg 1981, S.137.
- (43) H.v.Treitschke, *Politik. Vorlesungen gehalten an der Universität zu Berlin*, Hg.v. M.Cornicelius, Bd.1, 5.Aufl., Leipzig (1898) 1922, S.42f.
- (44) S.Neitzel, *Weltmacht oder Untergang. Die Weltreichslehre im Zeialter des Imperialismus*, Paderborn 2000, S.87, 94.
- (45) E.Hasse, *Deutsche Politik. Bd.2: Weltpolitik, H.1: Weltpolitik, Imperialismus und Kolonialpolitik*, München 1908, S.45f.
- (46) Hillgeuber, *Zwischen Hegemonie und Weltpolitik -Das Problem der Kontinuität von Bismarck bis Bethmann Hollweg*, in: *Deutsche Grossmachtpolitik im 19. und 20.Jahrhundert*, Düsseldorf 1977, S.61f.
- (47) Hillgruber, *Bismarcks Aussenpolitik*, S.195.
- (48) H.Gründer, *Geschichte der deutschen Kolonien*, 4.Aufl., Paderborn 2000. IIをみよ。
- (49) W.J.Mommsen, *Der autoritäre Nationalstaat. Verfassung, Gesellschaft und Kultur im deutschen Kaiserreich*, Frankfurt a.M. 1992, S.186.

- (50) Gründer, a.a.O., S.102f.
- (51) A.a.O., S.235-245.
- (52) H-U.Weehler, Das Deutsche Kaiserreich. 1871-1918, 7.Aufl., Göttingen 1994. 『ドイツ帝国』大野英二・肥前榮一訳(未来社、1983年)
- (53) Mommsen, a.a.O., S.190f.
- (54) Hasse, a.a.O., S.71. F. Neumann, Mitteleuropa, Berlin 1915.
- (55) Mommsen, a.a.O., S.201.
- (56) Hillgruber, Zwischen Hegemonie und Weltpolitik. S.69f.
- (57) Mein Kampf, S.178. (上) 236頁。
- (58) W.D.Smith, The Ideological Origins of Nazi Imperialism, New York 1986, p.53.
- (59) Op.cit., pp.70-71.
- (60) Op.cit., pp.283-84.
- (61) Op.cit., pp.106-7. M.Sering, Die inner Kolonisation in östlichen Deutschland, Leipzig 1893.
- (62) Hasse, Deutsche Politik, Bd.1, Heimatpolitik, H.2: Die Besiedelung des deutschen Volksbodens, München 1905, S.77.
- (63) V.G.Liulevicius, War Land on the Eastern Front. Culture, National Identity and German Occupation in World War I, Cambridge 2000, p.21.
- (64) Op.cit., pp.60-62.
- (65) ルーデンドルフについては最新の研究をみよ。M. Nebelin, Ludendorff. Diktator im Ersten Weltkrieg, München 2010.
- (66) E.Ludendorff, Meine Kriegserinnerungen 1914-1918, Berlin 1919. S.146.
- (67) Liulevicius, op.cit., p.163.
- (68) Op.cit., p.73.
- (69) A.H.Sammartino, The Impossible Border. Germany and the East, 1914-1922, Ithaca 2010, p.35.
- (70) Liulevicius, op.cit., p.81, Cf., p.177.
- (71) Nebelin, a.a.O., S.192.
- (72) Sammartino, op.cit., p.31.
- (73) Ludendorff, a.a.O., S.161.
- (74) Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd.4: vom Beginn des Ersten Weltkriegs bis zur Gründung der beiden deutschen Staaten 1914-1949, 2.Aufl., München 2003, S.152. Liulevicius, op.cit., p.206.
- (75) Sammartino, op.cit., pp.40-41.
- (76) Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd.4, S.154.
- (77) H.Rauschnig, Gespräche mit Hitler, Zürich 1940. 『ヒトラーとの対話』

船戸満之訳 (学芸書房、1972年) A. Bullock, Hitler A Study in Tyranny, London (1952, 1962) 1990. 『アドルフ・ヒトラー』(I)(II) 大西尹明訳 (みすず書房、1958、1960年) A.J.P.Taylor, The Origin of the Second World War, 2ed., 1964. 『第二次世界大戦の起源』吉田輝夫訳 (講談社学術文庫、2011年) D.L.Hoggan, Der erzwungene Krieg. Die Ursachen und Urheber des 2. Weltkrieges, Tübingen 1963. ホーガンは後にホロコースト否定論者となった。

- (78) ヒトラーの政治構想について、私は次の研究に多くを負っている。H.R. Trevor-Roper, Hitlers Kriegsziele, in: VfZ, Jg.8 (1960), H.2. Hillgruber, Deutschlands Rolle in der Vorgeschichte der beiden Weltkriege, 3Aufl., Göttingen 1986. K.Hildebrand, Hitlers Programm und seine Realisierung 1939-1942, in: Hitler, Deutschland und Mächte. Materialien zur Aussenpolitik des Dritten Reiches, hg.v. M.Funke, Düsseldorf 1976, ders., Deutsche Aussenpolitik 1933-1945. Kalkül oder Dogma?, 4Aufl., Stuttgart 1980. E.Jäckel, Hitlers Weltanschauung. Entwurf einer Herrschaft, 3.Aufl., Stuttgart 1986. 『ヒトラーの世界観』滝田毅訳 (南窓社、1991年) J.Thies, Architekt der Weltherrschaft. Die Endziele Hitlers, Düsseldorf 1980.
- (79) M.Broszat, Der Staat Hitlers, München 1969, S.426. H.Mommsen, Hitlers Stellung im nationalsozialistischen Herrschaftssystem, in: Von der Weimar nach Auschwitz. Zur Geschichte Deutschland in der Weltkriegsepoche, Stuttgart 1999, S.225f.
- (80) ドイツ祖国党については次の研究をみよ。D.Stegmann, Von Neokonservatismus zum Proto-Faschismus. Konservative Partei, Vereine und Verbände 1893-1920, in: Deutscher Konservatismus im 19. und 20. Jahrhundert, hg.v. Stegmann, B-T.Wendt, P-C.Witte, Bonn 1983, S.219-222.
- (81) A.Kuhn, Hitlers aussenpolitisches Programm. Entstehung und Entwicklung 1919-1939, Stuttgart 1970, S.48.
- (82) Mein Kampf, S.742. (下) 396頁。
- (83) Hillgruber, Die Endlösung und das deutsche Ostimperium als Kernstück des rassenideologischen Programms des Nationalsozialismus, in: Deutsche Grossmacht-und Weltpolitik im 19. und 20.Jahrhundert, S.256. Vgl., Mein Kampf, S.742f, 750ff. (下) 396, 405-08頁。
- (84) Kuhn, a.a.O., S.89.
- (85) Mein Kampf, S.733. (下) 385頁。
- (86) A.a.O., S.154. (上) 206頁。
- (87) A.a.O., S.742. (下) 395頁。
- (88) Hitlers Zwites Buch, S.102. (続) 133-34頁。

- (89) Hitler, Monologe im Führerhauptquartier 1941-1944, Ausgegeben v. H. Heim hg.v. W.Jochmann, München 2000, S.55.
- (90) 谷喬夫『ヒムラーとヒトラー —氷のユートピア』(講談社選書メチエ、2000年)第四章をみよ。
- (91) 谷喬夫「ハインリヒ・クラースの戦争目的論—ナチ・イデオロギーの系譜学」法政理論第40巻2号(2007年)をみよ。
- (92) Hillgruber, Die Endlösung und das deutsche Ostimperium, S.259f.
- (93) Hildebrand, Deutsche Aussenpolitik 1933-1945, S.27. Hillgruber, Deutschlands Rolle, S.69, ders, Endlich genug über Nationalsozialismus und Zweiten Weltkrieg? Düsseldorf 1982, S.34f. J.Thies, a.a.O., S.152f, 191.
- (94) Hillgruber, Deutschlands Rolle, S.76.
- (95) T.Vogelsang, Neue Dokumente zur Geschichte der Reichswehr 1930-1933, Nr.8, Handschr. Aufzeichnungen des Gen.Lt.Liebmann, in: VfZ, Jg.2 (1954) H.4, S.455. この講演の出席者、筆記録がドイツ共産党のスパイによってモスクワへ送付されたこと、さらにこの筆記録の位置づけについては次をみよ。A. Wirsching, “Mann kann nur Boden germanisieren” Eine neue Quelle zu Hitlers Rede vor den Spitzen der Reichswehr am 3.Februar 1933, in: VfZ, Jg.49 (2001), H.3.
- (96) F.Hossbach, Zwischen Wehrmacht und Hitler 1934-1938, 2.Aufl., Göttingen 1965. に所収。なおテイラーやホーガンは、この報告の信憑性に疑問を呈しているが、これに対する妥当な批判として次をみよ。W. Bussmann, Zur Entstehung und Überlieferung der “Hossbach-Niederschrift”, in: VfZ, Jg.16 (1968), H.4.
- (97) Kuhn, a.a.O., S.242, Hildebrand, a.a.O., S.95.
- (98) Hillgruber, Deutschlands Rolle, S.86f. なおヒトラーは、自決直前の「政治的遺書」においても、自分が1939年のポーランド攻撃の3日前に英国大使に、ポーランド国境地帯の国際的管理も含む提案をし、英国との戦争を望んでいなかったのだと述べている。Hitlers Briefe und Notizen. Sein Weltbild in hand-Schriftlichen Dokumenten, hg.v. W.Maser, Graz-Stuttgart 2002, S.359.『ヒトラーの遺言』篠原正瑛訳(原書房、1991年)153-54頁。
- (99) Hildebrand, a.a.O., S.56.
- (100) Kuhn, a.a.O., S.265.
- (101) Hillgruber, Deutschlands Rolle, S.98f.
- (102) Hildebrand, a.a.O., S.103, 107.
- (103) Hillgruber, a.a.O., S.126.
- (104) S.Haffner, Anmerkungen zu Hitler, München 1978.『ヒトラーとは何か』赤羽龍夫訳(草思社、1979年)Hildebrand, Hitlers Programm und seine

- Realisierung 1939-1942, S.89f.
- (105) ヒトラーはミュンヘン一揆後、ランツベルク拘置所で、R. ヘスの師であったミュンヘン大学地政学教授K.ハウスホーファーから、ラッツエルの『政治地理学』を手渡され読んだ。『わが闘争』に登場する〈生存圏〉という言葉は、内容的には全ドイツ派の領土要求を引き継ぐものであるが、ラッツエルとハウスホーファーに由来する。K.Lange, Der Terminus Lebensraum in Hitlers Mein Kampf, in: VfZ, Jg.13 (1965), H.4.
- (106) Kuhn, a.a.O., S.118, 121.
- (107) Hitlers Briefe und Notizen, hg.v. Maser, S.277.
- (108) A.Tyrell, Vom Trommler zum Fühler. Der Wandel von Hitlers Verständniss zwischen 1919 und 1924 und Entwicklung der NSDAP, München 1975, S.62, 223.
- (109) H.Auerbach, Hitlers Politische Lehrjahr und die Münchner Gesellschaft 1919-1923. Versuche einer Bilanz anhand der neueren Forschung, in: VfZ, Jg.25 (1977), H.1, S.44. ヒトラーとナチ党は、1925年の共和国大統領選挙でルーデンドルフをかついで惨敗した。その後、ヒトラーとルーデンドルフの関係は冷めたものになっていった。
- (110) A.a.O., S.21. Liulevicius, op.cit., pp.258-59.
- (111) Auerbach, a.a.O., S.15, 30.
- (112) W.Wippermann, Der Deutsche Drang nach Osten, Ideologie und Wirklichkeit eines politischen Schlagwortes, Darmstadt 1981, S.4.
- (113) H.C.Meyer, Drang nach Osten, Fortunes of a Slogan-concept in German Slavic Relation. 1894-1990, Bern 1996, pp.24-25, 101.
- (114) L.Dralle, Die Deutschen in Ostmittel- und Osteuropa. Eine Jahrtausend europäischer Geschichte, Darmstadt 1991, S.27. ヨーロッパ東方への移住者は、13世紀には、7300万人にも上ったと推計される。なおドイツの東方移民については、次の研究をみよ。C. イグネ『ドイツ植民と東欧世界の形成』宮島直機訳 (彩流社、1997年)
- (115) Wippermann, a.a.O., S.92f. なおトライチュケについては次をみよ。谷喬夫「トライチュケのドイツ騎士団国プロイセン」法学新報第112巻7・8号 (2006年)
- (116) H.Class, Wider den Strom. Vom Werden und Wachsen der nationalen Opposition im alten Reich, Leipzig 1932, S.15.
- (117) A.Kruck, Geschichte des Alldeutschen Verbandes 1890-1939, Wiesbaden 1954, S.192.
- (118) Einhard (=H.Class), Deutsche Geschichte, Leipzig 1909, S.56.
- (119) A.a.O., S.80.